メンシェヴィキ党とロシア共産党

尼川創二

【要約】ソ連史学はメンシェヴィキ党を「小ブルジョア政党」と見なしている。しかし、メンシェヴィキ党は、何よりも労働者階級の利益を重要視した党であった。一〇月革命後、マールトフの率いるメンシェヴィキ党が新体制内の合法的反対党の道を選択したのも、ボリシェヴィキ党＝ロシア共産党の背後にロシアの労働者階級が実在していると見たからであった。メンシェヴィキ党は、ソヴィエト内部で労働者の支持を集め、彼らの圧力によって、ソヴィエト政権を「正常な道」へ向けようとした。ソ連史学は、メンシェヴィキ党が大衆の利益を裏切り、大衆の支持を失って自滅したのだと主張しているが、実際には同党は共産党の強硬な諸政策に不満を抱く労働者大衆の支持を再度獲得しつつあったのであり、それゆえにこそ、しばしば共産党側から弾圧を受けたのである。一九二一年春、「戦時共産主義」の破綻と大衆の反乱に直面した共産党政権は、メンシェヴィキ党を危険視し、強力な弾圧を加え、崩壊させた。共産党政権は残ったが、かつて共産党が鼓吹していた「ソヴィエト民主主義」は著しくその実質を失ったといえるであろう。

史林　七一巻四号　一九八八年七月

序

かつて私は、一九二一年夏より実施されたロシア共産党の粛清（不適格者の除名）と労働者反対派への弾圧の問題を扱ったことがある。[1] 労働者反対派とは、労働組合の地位の向上、労働者民主主義の拡大、国家と党の官僚制化の阻止などを主張した党内グループであるが、「戦時共産主義」末期に勃発した「小ブルジョア的反革命」と関連づけられて攻撃され、二一年三月の第一〇回党大会で解散を命じられていた。二一年七月に出された「党粛清について」の党中央委員会の呼び

かけには、「党内で異見を有する者についての（例えば、かつての『労働者反対派』等に対する）弾圧は決して容認されない」という一文が見える。だが、私見では、実際には、この粛清に際して労働者反対派の下部のメンバーに弾圧が加えられた疑いは濃厚である。私は、第一〇回党大会による分派の禁止、党中央への権力の集中に加え、この二一年粛清にも、スターリン時代に連続する要素が見られると思う（無論、レーニン時代とスターリン時代との質的な差異を認めたうえである）。

ロシア共産党内で反対派に対する闘争が進行していた時期に、即ち「戦時共産主義」からネップへの転換の時期に、党内では「小ブルジョア諸党」に対する闘争が進行していた。実際、労働者反対派は「小ブルジョア諸党」との思想的類似性のゆえに攻撃されていたし、二一年粛清では、「小ブルジョア諸党」、とりわけメンシェヴィキ党から共産党に移ってきた者が、「特に入念な点検を要する特別の部類」と見なされたのである。もっとも、国内でエスエル党とメンシェヴィキ党の活動が停止するのは、ソ連で有力な見解によれば、それぞれ一九二三年、二四年のことである。そして、ちょうどそのころ、共産党内ではトロツキー派が政策批判を開始し、「進行中の粛清」における同派への弾圧に抗議していた。

共産党からの反対派の排除の問題は、ソヴィエト体制からの反対党の排除の問題に密接に関連しているように思われる。こうして、私の関心は、反対党、特に国内で最も遅くまで活動を続けたメンシェヴィキ党に向かっていった。

一〇月革命後のメンシェヴィキ党についてまず目立つ点は、同党の指導部が、エスエル党や左翼エスエル党の場合とは異なり、ソヴィエト政権（共産党政権）に対する武力闘争を拒否し続け、ソヴィエト体制内部の「合法的反対党」を志向し、内部からの体制の改革を追求し続けたことである。メンシェヴィキ党はなぜこのような道を選択したのか。政権の座にあったロシア共産党は、このようなメンシェヴィキ党にどう対応したのか。

ソ連史学は、メンシェヴィキ党を、エスエル党、左翼エスエル党などと共に「小ブルジョア政党」の範疇に入れ、その「小ブルジョア的」、「反革命的」、「反ソヴィエト的」、「反人民的」性格を強調している。[2] ソ連史学もこれら諸党の差異を見ないではない。しかし、力点は、これら諸党の思想・行動・社会的基盤は本質的には同一のものである、という主張に

置かれているように思われる。[3] メンシェヴィキ党の「合法的反対党」志向も、単なる「戦術」、「口先」だけのものでしかないと見なされている。[4]

だが、メンシェヴィキ党を「小ブルジョア政党」の範疇に押し込めることによって、ソ連史学は、メンシェヴィキ党とエスエル党との相違点、またロシア共産党にとってメンシェヴィキ党が真に脅威となった点を究明する道を自ら閉ざしているのではなかろうか。ソ連史学においてメンシェヴィキ党の研究がエスエル党や左翼エスエル党の研究に比べて遙かに立ち遅れていることも、[5] 右に述べたことと関係しているのではないか。即ち、メンシェヴィキ党は、ソ連史学の提示する「小ブルジョア政党」についての図式にはまりきらぬ面を多分にもっているのではないか。

「小ブルジョア諸党」はどのようにしてソヴィエト・ロシアの政治舞台から姿を消したか。この問題はいわゆる「一党制」の形成の問題に直結する。ソ連では、「一党制」の内容や成立の時期については研究者間に意見の相違があるものの、[6] 「一党制」が「小ブルジョア政党」の「自己破産」の結果生じたのだという点では、基本的合意があると見てよいであろう。

ギンペリソーンは一九六五年に次のように述べている。「コムニストが社会主義革命の勝利ののちにすべての民主主義的諸党を暴力的方法で解散させ、それによって一党国家制を確立したという見解は、反共宣伝のなかで最もはやっている見解の一つである。社会主義の敵は、ブルジョア諸国の民主主義的諸党を脅し、それらの党を共産党に敵対させ、帝国主義に対する闘争における全民主勢力の行動の統一を阻止するために、この見解を広く利用しているのである。[7]」。

スピーリンもまた六六年に次のように書いている。「ブルジョア歴史家は……わが国における小ブルジョア諸党の破滅の根本原因となったのは、これらの党の破産ではなく、ボリシェヴィキ党による根絶であったという考えを読者に吹き込もうと努めている。ソ連の歴史家は、このようなブルジョアジーの弁護人たちの捏造に科学的論証を対置しなければならない。[8]」。

まさにここに、「小ブルジョア諸党」の崩壊と「一党制」の形成に関するソ連史学の基本姿勢が示されているように思われる。

ソ連でのこれまでの研究成果を概観しているシヴォーヒナ論文[9]に依りながら、ソ連史学の基本的主張をいま少し詳しく見てみよう。それはほぼ次のようになろう。

「小ブルジョア諸党」に対するボリシェヴィキの戦術の要点は、これらの党の理論的見解や政治的コースの「非一貫性」を暴露しつつ、非プロレタリア勤労大衆を自分の側に引き寄せることであった。一〇月革命直前にこれらの党は既に「政治的に破産」していた。そのことは、大衆間でのこれらの党の影響力の低下、ボリシェヴィキのスローガンに対する大衆の支持の増大、諸ソヴィエトのボリシェヴィキ化、農民蜂起、「小ブルジョア諸党」内部での左翼反対派の成長、等の諸事実によって確認できる。

しかし、一〇月革命直前の「小ブルジョア諸党」の「政治的破産」は、それらの党の「完全な思想的・組織的崩壊」を意味してはいなかった。一〇月革命後、これらの党は「ロシア共産党の指導的役割」を認めず、反革命的行動を起こし、ソヴィエト政権に敵対し、都市と農村の勤労大衆の利益を裏切り、その結果、勤労大衆の支持を失っていった。共産党は、これらの党のソヴィエト政権への敵対には「革命的抑圧」を加えざるをえなかったが、他方では状況に応じて協調し、これらの党の個々の活動家やグループを共産党内に引き入れるという「柔軟な戦術」を採った。こうして、これらの党は「自己崩壊」の道を辿ったのである。

欧米の研究者は「一党制」ないし「一党独裁」の形成の問題をどのように見ているか。

E・H・カーは、もともとメンシェヴィキやエスエルなどの政治的敗北者には強い関心をもっていないようだが、一九五〇年に、ソ連史学に近い、次のような意見を述べている。「合法的反対党という作りごとはすでに〔二二年のエスエル裁判[10]の〕ずっと以前に死んでいた。その死を、一党の戸口にのみおくのは、正当でない。もしボリシェヴィキ体制は、最初の

二、三ヵ月以後は、組織的な反対党を許容する用意がなかったのが本当だというならば、合法的限界内に留まる用意を整えた反対党が一つもなかったということも等しく本当である。独裁の前提は、議論の双方の側に共通のものであった[11]」。

五年後、シャピロは、これを批判して次のように書いている。「この判断は、メンシェヴィキだけでなくエスエルの大半の者をも無視している。確かに独裁の前提はレーニンとデニーキンの『議論』の双方の側に共通のものであった。しかし、マールトフとメンシェヴィキ――その政策は『合法的限界内に留まる』必要に基礎を置いていた――の場合には、このような主張は事実とどうつながるのか。または、右翼独裁の勝利を助けることを恐れて闘争をやめたサマーラのエスエル「ヴォリスキーらのグループ」の場合には？[12]」。

その後、欧米では一〇月革命後のメンシェヴィキについて注目すべき著作が続々と発表されている[13]。それらの殆どはソ連史学とは観点を異にしているものである。私は双方の主張を比較しつつ、一〇月革命からメンシェヴィキ党が崩壊するまでの、同党とロシア共産党との関係を考察してみたい。なお、日本では、当該時期のメンシェヴィキ党を主対象とした論文は、私の知る限り皆無だが[14]、エスエル研究で知られる高岡健次郎氏が、一九七七年に発表した一党制の形成についての重厚な論文[15]のなかで革命後のメンシェヴィキ党の軌跡をも辿っている。それについての高岡氏の解釈はソ連史学のそれとは同一ではないが、当時の共産党政権の側に殆ど問題を認めていないという点では、ソ連史学の立場にかなり近いように思われる。

本稿では、一八年一月末以前の日付を旧暦で、それ以後を新暦で記す。

① 拙稿「一九二一年ロシア共産党粛清」『史林』六六巻一号、一九八三年三月、三三―六九頁。

② См. Т. А. Сивохина. Современная историография политического банкротства мелкобуржуазных партий в Советской России.―《История и историки. 1976》. М., 1979, стр. 73-78.

③ См. там же. このほか Л. М. Спирин. Историография борьбы РКП(б) с мелкобуржуазными партиями в 1917―1920 гг.―《Вопросы истории КПСС》, 1966, № 4. стр. 101-108; М. Н. Стишов. Распад мелкобуржуазных партий в России.―《Вопросы истории》, 1968, № 2, стр. 58-74; М. Н. Стишов. Опыт периодизации истории борьбы боль-

шевизма с мелкобуржуазными партиями (1917–1930-е годы).—《Вестник Московского университета》, Сер. История, 1977, № 6, стр. 20–40; Непролетарские партии России: Уроки истории. М., 1984 等々を参照。

なお、特にメンシェヴィキ党とエスエル党は、一括して論じられることが多い。例えば П. И. Соболева. Борьба большевиков против меньшевиков и эсеров за ленинскую политику мира (ноябрь 1917–1918 гг.). М., 1965; П. И. Соболева. Октябрьская революция и крах социал-соглашателей. М., 1968; П. А. Подболотов. Крах эсеро-меньшевистской контрреволюции. Л., 1975.

④ 例えば Л. М. Спирин. Классы и партии в гражданской войне в России (1917–1920 гг.). М., 1968. стр. 307–308.

⑤ См. Сивохина, Современная..., стр. 78. 一〇月革命後のエスエル党と左翼エスエル党については、ゼーセフらによって数冊の研究書が出されており、論文も比較的多い。

メンシェヴィキ党についての研究書では Н. В. Рубан. Октябрьская революция и крах меньшевиков (март 1917–1918 г.). М., 1968 が有名である。ただし、ルバンは、メンシェヴィキ党は一〇月革命後は「事実上、政党ではなくなった」(стр. 389) という見解（シヴォーヒナらから批判されている）を採っており、一八年以後の同党については詳細に検討していない。

なお、二〇年代には И. Вардин. Революция и меньшевизм. М.-Л., 1925 という大部の著作が出されている。ヴァルディンとはムゲラーゼ（拙稿「ロシア共産党の社会的構成——一九一七～一九二〇年——」『史林』六二巻三号、一九七九年五月、七二～七五頁参照）の筆名。ヴァルディンは最後はトロツキストとして獄死した。そのためもあってか、現代のソ連人研究者はこの著作にあまり言及しない。スピーリンは、ヴァルディンが「一九一七～二〇年の公式のメンシェヴィズムは『半ボリシェヴィズム』であった」と記している (стр. 311) のを取りあげて、非難している。過大評価だと考えているようである (Спирин. Историография.... стр. 102)。

⑥ 高岡健次郎「ソ連における『一党制』形成期をめぐる問題点」札幌商科大学・札幌短期大学『論集』一九号、一九七七年、一八九～一九七頁参照。

⑦ Е. И. Гимперсон. Из истории образования однопартийной системы в СССР.—《Вопросы истории》, № 11, ноябрь 1965 г., стр. 16.

⑧ Спирин. Историография..., стр. 108.

⑨ Сивохина. Современная.... стр. 71–86.

⑩ ソ体制の最初の大きな政治裁判。反革命的活動を行なったかどで、数十人のエスエル党員が裁かれた。西側の詳細な研究書として M. Jansen, *A Show Trial Under Lenin: The Trial of the Socialist Revolutionaries, Moscow 1922*, The Hague, 1982 がある。

⑪ E. H. Carr, *The Bolshevik Revolution, 1917–1923*, Pelican Books, vol. 1, 1966 (first published 1950 by Macmillan), p. 190. 原田三郎他訳『ボリシェヴィキ革命』第一巻、みすず書房、一九六七年、一五三頁。

⑫ L. Schapiro, *The Origin of the Communist Autocracy: Political Opposition in the Soviet State: First Phase, 1917–1922*, London, 1955, p. 355, footnote.

⑬ 主要なもののみを記す。まず、メンシェヴィキが執筆したものとして R. R. Abramovitch, *The Soviet Revolution 1917–1939*, New York, 1962; Б. Двинов. От легальности к подполью (1921–1922), Stanford, 1968; L. H. Haimson (ed.), *The Mensheviks: From the Revolution of 1917 to the Second World War*, with Contributions

by D. Dallin, G. Denicke, L. Lande, B. Sapir, S. Wolin and G. Doctorow, translated by G. Vakar, Chicago—London, 1974 なども ある。

資料集としてA. Ascher (ed.), *The Mensheviks in the Russian Revolution*, Ithaca, New York, 1976; *Sozialistische Revolution in einem unterentwickelten Land?: Text der Menschewiki zur russischen Revolution und zum Sowjetstaat aus den Jahren 1903 bis 1940*, Hamburg, 1981 がある。

研究書・論文としてI. Getzler, *Martov: A Political Biography of a Russian Social Democrat*, London, 1967, 高橋磐訳『マールトフとロシア革命』河出書房新社、一九七五年; A. Ascher, *Pavel Axelrod and the Development of Mensheivsn*, Cambridge, Mass., 1972; L. H. Haimson, "The Mensheviks after the October Revolution," Part 1, 2, 3, *Russian Review*, vol. 38, no. 4, 1979, pp. 456–473 / vol. 39, no. 2, 1980, pp. 181–207 / vol. 39, no. 4, pp. 462–483 (憲法制定議会まで); V. N. Brovkin, "The Mensheviks and NEP Society in Russia," *Russian History / Histoire russe*, 9, Pts 2 / 3, 1982, pp. 347–377; V. Broido, *Lenin and the Mensheviks: The Persecution of Socialists under Bolshevism*, Boulder, Colorado, 1987; V. N. Brovkin, *The Mensheviks after October: Socialist Opposition and the Rise of the Bolshevik Dictatorship*, Ithaca, New York, 1987 (一九年一月までのメンシェヴィキ党史についての包括的研究) などがある。また、A. Ascher, "Russian Marxism and the German Revolution, 1917–1920," *Archiv für Sozialgeschichte*, VI / VII. 1966 / 67, S. 391–439 も非常に有益であった。

なお、本稿では、邦訳のあるものについては、すべてその訳本のページを記載してあるが、訳文を自己流に変更したところがあることをお断わりしておく。

⑭ 一〇月革命までのメンシェヴィキ党については、高橋磐「メンシェヴィキ論」菊地昌典編『ロシア革命論——歴史の復権』田畑書店、一九七七年、二一—六〇頁、加藤一郎『ロシア社会民主労働党史』五月社、一九七九年。

⑮ 高岡健次郎「ロシア革命と一党制の形成」中野徹他編『スターリン問題研究序説』大月書店、一九七七年、七三—一二八頁。

一　一〇月革命とその直後

周知のように、二月革命後、メンシェヴィキ党はエスエル党と共にペトログラード・ソヴィエトを先頭とする諸ソヴィエトの指導部を構成していた。しかし、メンシェヴィキ党が掌握していた労働者大衆はやがて同党に見切りをつけ、ボリシェヴィキ党のもとへ移っていく。二月革命勃発以後の激動するロシアにおいて政治の舞台に押し出されてきた大衆の切実な諸要求を鋭く把握し、彼らを扇動し、自らのもとへ引き入れる努力と能力にかけては、ボリシェヴィキ党に比肩しうる政党は存在しなかった。即時の社会主義革命という大目標を設定しえたことが、ボリシェヴィキに巨大な活力を与えて

いたように思われる。

大衆が雪崩を打ってボリシェヴィキ側に移動していくなかで、メンシェヴィキ党内でも、革命ロシアの防衛のための戦争の継続を主張していた革命的祖国防衛派の発言力が弱まり、戦争反対の主張を貫いていたマールトフらメンシェヴィキ国際派の力が増大してくる。ロシアのブルジョアジーが反革命勢力に転じたことを感知したマールトフは、主としてソヴィエトに結集する諸政党から構成される、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的政府の樹立を、七月初めごろから主張していた。[1]

一七年一〇月、ボリシェヴィキの権力奪取の動きが強まるなかで、マールトフは、病気のためカフカーズに去ったツェレテーリに代わり党の指導者となったダンへの説得に成功し、左派を含むエスエル党にも働きかけて、ボリシェヴィキに対抗しうる平和・土地政策を有する「左翼ブロック」を予備議会のなかにつくろうと努めた。しかし、これは遅すぎたのである。マールトフが起草した「左翼ブロック」決議案がようやく予備議会で採択されたのは、一〇月二四日であった。ボリシェヴィキの権力奪取が、マールトフの構想を吹き飛ばしてしまったのである。[2]

メンシェヴィキの指導者たちはボリシェヴィキの権力奪取に激しく反発した。彼らはボリシェヴィキ政権の前途を次のように見ていた。西欧での社会主義革命の展望は明確なものとなってはいない。[3]そのような時に、いまだ社会主義のための前提条件が整っていない後進国ロシアに社会主義を植えつけようとする試みは、農民や多くの都市住民からの抵抗を受けるであろう。民主主義勢力から自己を切り離したボリシェヴィキ政府は、「最悪の種類の独裁」、即ち「銃剣に依拠し、人民の自由意志を抑圧する少数者の政府」に不可避的に転化するであろう。赤色テロルは反動体制と白色テロルを引き出すであろう、と。[4]

レーニンが一党による権力掌握と独裁を考慮するようになったのは、七月事件に際して臨時政府がボリシェヴィキを弾圧した時からであろう。これ以後、レーニンはエスエル党とメンシェヴィキ党を見限った。しかし、一〇月蜂起が成功し

た時、レーニンはエスエル左派に新政府への参加を呼びかけた。エスエル左派は一〇月蜂起を支持していたし、そのうえ、その背後には、ボリシェヴィキがいまだに把握できていない膨大な革命的農民が存在していたからである。

しかし、エスエル左派は入閣の申し出を拒み続けた。彼らは「革命的民主主義」勢力との決裂を恐れていた。結局、ボリシェヴィキ党は、単独で「臨時労農政府」を形成することになった。だが、そのボリシェヴィキ党の内部でも、同党が単独で進んでいくことに懸念を抱く者は決して少なくはなかった。

ボリシェヴィキの「権力簒奪」に憤激し、第二回ソヴィエト大会の席を蹴って出たエスエルとメンシェヴィキは一〇月二六日に「祖国と革命救済委員会」を結成した。これはボリシェヴィキ独裁に対抗する権力の核になるはずのものであった。しかし、この委員会は極めてルーズな組織でしかなかった。エスエルの極右派はこの委員会の名において勝手に突走り、他のメンバーの多くが知らぬ間にケレンスキーのための軍隊を探し求め、一〇月二九日、ペトログラードで士官候補生の蜂起を性急に組織した。この蜂起は直ちに粉砕された。[5]

士官候補生の蜂起の鎮圧後、メンシェヴィキ党中央委員会は新政権に対する武力打倒計画を断念した。ダンは再度マールトフに歩み寄り、交渉による解決を求めることになった。マールトフらメンシェヴィキ左派は、内戦を阻止するためボリシェヴィキ党を含む「同質民主主義派[6]」諸党を代表する政権の樹立を、第二回ソヴィエト大会以降訴え続けていたのである。

エスエル左派もまた、「同質革命的民主主義政府」――別の表現では「同質社会主義政府」――の樹立を求めていた。こうして、一〇月二九日より、鉄道従業員組合執行委員会の主催で、この問題に関するボリシェヴィキ党と他の諸党との交渉の会議が開かれた。この会議でメンシェヴィキ党とエスエル党はボリシェヴィキを含む連立政権樹立に同意するところまでいったが、政府からのレーニンとトロツキーの排除に固執し続けた。

このような条件を突きつけられながらも、ボリシェヴィキ党内では、穏健派を中心として、交渉を続け連立政府を実現

させようとする空気が強かったのである。特にモスクワのボリシェヴィキ党組織では、「同質社会主義政府」賛成派が優勢であったという。[7]

「同質社会主義政府」の提案は労働者間で相当の反響を引き起こした模様である。例えば、ボリシェヴィキの権力奪取を支持していたペトログラード労働組合評議会は、一〇月三〇日、「全社会主義政党間での即時の和解」を、またそれらすべてを含む政府を要求するようになった。ボリシェヴィキが完全に掌握していたヴィボルグ地区ソヴィエトも、オブホフ金属労働者も、同じころ全社会主義政党よりなる政府を要求するに至った。[8] しかし、この交渉を権力が安定するまでの単なる駆け引きと見なしていたレーニンは、[9] 交渉相手に妥協的態度を示していたカーメネフ、リャザーノフらボリシェヴィキ党内の穏健派を激しく非難し、離党すら勧告している。[10]

交渉決裂後の一一月五日、ボリシェヴィキ穏健派の党中央委員（カーメネフ、ルィコフ、ミリューチン、ジノヴィエフ、ノギーン）と人民委員（ノギーン、ルィコフ、ミリューチン、テオドローヴィチ）が辞職声明を発表した。人民委員の辞職声明には、他にリャザーノフ、ラーリンら六名が署名している。[11] [12] のちに労働者反対派の指導者となるシリャープニコフは穏健派ではなく急進的理想主義者というべきであろうが、[13] この時はカーメネフらと同意見である旨の声明を単独で出している。[14]

ジノヴィエフはまもなく態度を変え、一一月七日、「メンシェヴィキとエスエルは協定を望まなかった。……いかなる分裂もわが党内に生じてはならない」[15] と声明して、中央委員に自主的に復帰した。他の穏健派の人々も、一二月九日にボリシェヴィキ党と左翼エスエル党との間で連立政府についての合意が成立したために、党内での影響力を失っていった。

こうしてボリシェヴィキ穏健派は敗北した。しかし、彼らは依然として党内に存在し続けたのであり、マールトフらは引き続き彼らに望みをかけていたのである。レーニンがこれに気づかないわけはなかった。マールトフらに対するレーニンの厳しい対応の背後にこうした事情があったことに、我々は注意しなければならないであろう。

メンシェヴィキ党の主導権をマールトフら左派が掌握したのは一七年一二月初めの党大会（最後の党大会）においてであ

った。しかし、一一月の全露憲法制定議会選挙の結果は、同党の完膚なきまでの敗北を告げるものであった。

選挙結果（一部地域は不明）を概観すると、エスエル党（候補者名簿は左派が分離・独立する前に作成されていた）は得票率四〇・二％で首位に立ち、ボリシェヴィキ党が二四・〇％で第二位、カデット党が四・七％で第三位である。第四位のメンシェヴィキ党は二・六％にすぎない。しかも、ボリシェヴィキ党がペトログラード市とモスクワ市（共に守備隊を含む）でそれぞれ四五・一％、四八・二％で首位に立ち、他の主要都市と工業地帯、守備隊と戦線で圧勝したのに対し、メンシェヴィキ党はグルジアを含むザカフカージェでは他党を大きく引き離したが、ペトログラード市とモスクワ市ではそれぞれ三・二％、二・八％にとどまった。県庁所在地での得票率も五・八％にすぎなかった。[16]

メンシェヴィキが広範な大衆的支持を獲得しえた地域はグルジアだけであり、しかも同地のメンシェヴィキはロシアの党から分離する傾向を強めていた（一八年一一月には、グルジアのメンシェヴィキはロシアの党から完全に独立した党を結成し、全く別の道を歩むことになる）。グルジア以外でのメンシェヴィキ党の得票率の異様なまでの低さは、この党が危機的状態に陥っていたことをはっきりと示している。労働者大衆に見捨てられ、極度に弱体化した党を、マールトフは引き継いだのである。

一八年一月、ボリシェヴィキ党は、「ソヴィエト民主主義」を「ブルジョア民主主義」の上位に置くという見地から、憲法制定議会の解散を決行したが、これは、主として農民票を集めて議会内で首位を占めていたエスエル党を怒らせ、同党をボリシェヴィキ体制の武力打倒の道へと向かわせる一因となった。しかし、武力打倒は一八年五月までは同党の基本方針とはならず、同党はメンシェヴィキ党と共に、憲法制定議会解散直後に開かれた第三回全露ソヴィエト大会（ボリシェヴィキと左翼エスエルが多数を占めた）に代議員を送っている。

メンシェヴィキ党も憲法制定議会解散に抗議し、その再招集を要求した。メンシェヴィキはソヴィエト制度よりも憲法制定議会のような民主主義的議会制度を上位に置いていた。ソヴィエト選挙は普通・直接・平等の選挙ではなかったし、

また必ずしも秘密選挙ではなかった。[17] マールトフはソヴィエトを、プロレタリアートのあれこれの政治的任務や一般的任務を実現する能力に応じて評価されるべき、「革命時に生じる労働者階級の戦闘組織の一形態」と見なしていたのであり、それを国家機関として位置づけることに反対していた。[18]

ロシアの前に客観的に設定されている課題は社会主義の建設ではなく、「民主共和国」の樹立であった。マールトフはいう。「かつては旧体制の砦であり、プロレタリア的観点や心理とは遙かに隔っている武装兵士たちは、現時点では平和と土地を求める闘争において、労働者党と労働者階級を支持する用意ができている」。だが、この「物理的政治力」に頼り、ソヴィエト権力を通じて、労働者階級がいまだ少数である後進国ロシアに社会主義的生産形態を導入しようとする試みは、結局は非プロレタリア大衆の意志と衝突し、労働者階級の消耗と敗北に終ることになろう、と。[19]

しかし、メンシェヴィキ党は、ポトレソフやリーベルら右派は別として、武力による政府打倒の道を選ばなかった。その理由も、マールトフ自身が述べている。端的にいえば、ボリシェヴィキの背後には労働者階級が実在しているから、ということなのである。

メンシェヴィキから見れば道を誤っているとはいえ、労働者階級は、都市部での憲法制定議会選挙の結果にも示されているように、ボリシェヴィキ党を支持していた。同党に敵対することはロシアの労働者階級に敵対することであり、反革命勢力の介入に道を開くことにほかならなかった。従って、マルクス主義政党、労働者政党としてのメンシェヴィキ党の採りうる道は、ボリシェヴィキ党に武力で挑むことではなく、ソヴィエト内部にとどまり、労働者に働きかけてボリシェヴィキ党に圧力をかけ、ソヴィエト体制を内部から民主的なものになるよう改革すること以外にはなかったのである。[20] しかし、メンシェヴィキ党は、やがてソヴィエトから放逐される。

一八年六月一四日、全露ソヴィエト中央執行委員会は、エスエルおよびメンシェヴィキの全ソヴィエトからの追放に関する次のような内容の決議を採択した。――ソヴィエト政権は国の内外から攻撃を受け、極めて困難な時期にある。ソヴ

ィエト政権打倒をめざしている党の代表がソヴィエト内部にいることを許すことはできない。エスエル党とメンシェヴィキ党は、カレーディン、コルニーロフ、コルチャークらの公然たる反革命派と同盟して武力闘争を行なっている。ゆえに、この二党を全露中央執行委員会から追放すると共に、同様の措置をとるよう全ソヴィエトに提案する。[21]

確かにエスエルは、一方では諸ソヴィエト内で活動しながらも、他方では共産党に対して武力闘争を展開していた。カデット党とはある一線を画しながらも、自己の統制下に十分置くことのできない旧軍の将軍たちの軍事力に頼る傾向があったといえるであろう。[22] しかし、メンシェヴィキ党はどうであったか。

全露中央執行委員会の六・一四決議は、メンシェヴィキ党とエスエル党とを同列に置き、あたかもメンシェヴィキ全党が反革命勢力と結託しているかのように述べているが、これは事実に反している。エスエルとメンシェヴィキが一括され、さらに地主やブルジョアジーの反革命勢力に直結されるという構図は、以後のソ連の歴史書によく見られるものであるが、決して正確ではない。

メンシェヴィキが最も恐れていたのは、内戦が生じて労働者あるいは勤労者（農民を含む）同士が争い合い、反動勢力がこれに乗じて最終的勝利を得、二月革命後の民主主義的諸成果を払拭してしまうという事態であった。確かにメンシェヴィキ党中央委員会は共産党の諸政策を厳しく批判し続けていたが、武力闘争を呼びかけたという事実はない。武力闘争を唱えていた党内最右翼の代表であるポトレソフは当時中央委員ではなかった。[23]

それではメンシェヴィキの地方組織についてはどうか。六・一四決議がなされた第四次全露中央執行委員会での議事を見てみよう。共産党代表ソスノフスキーの攻撃に対しマールトフは逐一反論し、白衛派の蜂起にメンシェヴィキ党のいかなる組織も関与していない、と主張している。ただ、マールトフは、当時独立した行動をとっていたカフカーズ（グルジア）のメンシェヴィキがある集会を武力で解散し、その際「若干のボリシェヴィキが被害を受けた」ことを認めている。「我々は抗議し」、以後はそのようなことはなかった、と彼は述べている。[24] 共産党側の二番目の発言者ポクロフスキーも、「カ

フカースのメンシェヴィキだけを例外として、メンシェヴィキは武器をもって蜂起したことは決してなかった」と述べている。[26] 実際のところ、ソスノフスキーさえもが、エスエルは「主として軍事的活動を行なって」おり、メンシェヴィキは「より文官的な役割を引き受けて」いることを認めているのである。[27] 中央執行委員会での討論の様子を見るならば、メンシェヴィキ党全体がエスエルや旧軍の将軍たちと結託して共産党政権の武力打倒をたくらんでいるというような主張が根拠のないものであることは明らかである。

共産党に対する武力闘争を拒否するというメンシェヴィキ中央委員会の方針は、ソヴィエト追放後も一貫して保持されている。[28] ただし、この方針がすべての地方組織に受け容れられたわけではない。[29] また、党中央委員会は、一八年末までは、メンシェヴィキ右派が党内で中央委員会を批判することを許した。[30] しかし、党中央委員会は、一八年七月のヤロスラーヴリ蜂起に参加したサヴィノフとジューセンを除名するというヤロスラーヴリ委員会の決定を承認し、[31] また六月初めに成立したサマーラ政府に党中央委員マイスキーが参加したことをあとで知り、彼を党中央委員会から、のちには党から除名している。[32] こうした除名の事実については、ソ連人研究者たちは、無論熟知しているはずであるが、殆どあるいは全く言及していない。ルバンは「一人も党から除名されなかった」とさえ書いている。[33]

一八年六月一四日のソヴィエトからのメンシェヴィキの追放の真の理由は何であったか。まず、同年五月のチェコ軍団の反乱を契機にロシアが全面的な内戦に突入しつつあったという状況は無論重要であろう。レーニンは一〇月蜂起以前より内戦を不可避と考え、それに備えていた。むしろ内戦を歓迎していたとさえいえるであろう。しかし、和田春樹氏が指摘しているように、[34] レーニンは内戦が現実にはいかに恐るべき形態をとるかについては十分に予想していたようには見えない。ともあれ、内戦が始まってしまえば、「味方でないものはすべて敵」という観念が共産党を強く捉えていったであろうことは想像に難くない。確かにメンシェヴィキ党はソヴィエト内にとどまっていたが、いまだ一〇月蜂起を承認せず、共産党の諸政策を批判し続けていた。共産党は、メンシェヴィキ党が全体としては武装蜂起に関与してはいないことを知

りながらも、内戦勃発という状況下においては、もはやソヴィエト体制内での同党の存在を容認することはできず、[34]「バリケードの外へ」[35]放逐したのである。

しかし、ソヴィエトからのメンシェヴィキの追放の動因となったのは決して内戦の勃発という事情だけではない。既に内戦勃発前にメンシェヴィキ党は労働者大衆間で勢力を回復しつつあったのであり、共産党に脅威を与える存在になっていた。このことがメンシェヴィキ党追放に深く関係していたと見るべきである。

ソ連史学は一八年春と夏のメンシェヴィキ党およびエスエル党の影響力の増大を否定ないし無視し続けてきた。この二党の大衆的基盤の喪失を示すものとして引き合いに出されるのは、県ソヴィエト大会と郡ソヴィエト大会でのこの二党の議席獲得率である（市ソヴィエト大会の集計が抜けていることに注意せよ）。上の表に見られるように、メンシェヴィキと「右翼エスエル」即ちエスエルは極めてわずかな議席しか得ていない。このような表に基づいて、ギンペリソーンなどは、メンシェヴィキ党やエスエル党は大衆的基盤を全く失っていたと主張しているのである。[36]

県・郡ソヴィエト大会党派別構成
（1918年1—6月）

党　派	県大会	郡大会
コムニストと同調者	52.4%	48.4%
メンシェヴィキ	1.1	1.2
左翼エスエル	16.8	12.2
右翼エスエル	2.9	1.2
アナキスト	0.5	0.3
他の諸党	3.2	4.6
無党派	23.1	32.1

出典：Е. И. Гимперисон. Из истории образования однопартийной системы в СССР.—《Вопросы истории》, № 11, ноябрь 1965 г. стр. 16. なお，Советская историческая энциклопедия, т. 13, М., 1971, столб. 195 にもギムペリソーンが作成した同様の表がある。

しかし、ソ連人研究者のなかにも、この点についてあえて異を唱える人が出てきている。ソ連における「一党制」の形成の問題を考察したマラーシコは、例えばメンシェヴィキについては、次のような事例をあげている。——一八年三月のモスクワ市ソヴィエト選挙でメンシェヴィキは議席を「倍増」している（執行委員会内では共産党員四七名に対しメンシェヴィキは一八名）。[37] そのほか、オリョールなど多くの県庁所在地の市ソヴィエトでメンシェヴィキはエスエルと共に多数の議席を獲得している。五月にはメンシェヴィキが加わった政治的・経済的ストライキが各地で頻発している。七月後半のペトログラード市ソヴィエト選挙でも、メンシェヴィキは二四

議席（エスエルは四三議席）を獲得している。[38]

なお、右の事実からわかるように、六・一四決議以後もペトログラード市ソヴィエトはメンシェヴィキとエスエルを追放しなかったのである。モスクワ市ソヴィエトは六・一四決議以後はエスエル代議員のみを追放するにとどめている。[39]

一八年の春と夏の反政府的大衆運動の盛り上がりとメンシェヴィキ＝エスエル・ブロックの目ざましい伸張については、米国の研究者ブロフキンがより深い考察を行なっている。[40]

憲法制定議会を解散したのち、共産党はメンシェヴィキ党やエスエル党がソヴィエト制度の枠内で大衆の支持を求めて共産党（および左翼エスエル党）と競い合うことを承認した。一八年三月、メンシェヴィキ党は中央執行委員会のボイコットをやめ、諸ソヴィエトで多数の議席を得ることによって合法的に政権を掌握し憲法制定議会を再招集することを決定した。一方、このころまでに、それまでボリシェヴィキ党即ち共産党を支持してきた大衆の気分に重大な変化が生じていたのである。都市では経済の混乱の結果失業が増大し、食糧供給メカニズムの崩壊による飢餓が住民を脅かしていた。このような状況のもとでメンシェヴィキ党はエスエル党とブロックを組み、一八年春に行なわれた諸都市のソヴィエト選挙で大勝利を得たのである。

ブロフキンによれば、一八年春に実際に選挙が行なわれ、それについてのデータが残っているすべての欧露の県庁所在地の市ソヴィエトで、この二党のブロックは多数を占めた。[41] 地方都市では失業と飢餓に加え、中央から独立して行動していた地方共産党権力の高圧的態度と乱行が目立っていた。地方コムニストはあらたにメンシェヴィキとエスエルの支配下に入ったソヴィエトをしばしば武力をもって解散させた。これに抗議する労働者とコムニストの間であらたな衝突が起こり、最後には、多くの都市で戒厳令が発せられた。まさにこれが、一八年夏のヤロスラーヴリ蜂起を含む反政府武装蜂起の背景であった、とブロフキンはいうのである。

一八年六月一四日までには、メンシェヴィキとエスエルは、地方コムニストによって多くの県庁所在地の市ソヴィエト

から排除されていた。そしてこれら地方コムニストの指導者（特にサラートフの指導者）が、第五回全露ソヴィエト大会を間近かに控えていた共産党中央に、エスエルとメンシェヴィキをソヴィエトから追放するよう働きかけたらしい。[42]

一八年一月ごろより、労働者の間では、共産党によって選挙の延期や強制解散等の方法で操作されているソヴィエトに代わって自分たちの意思を表明できる自主的な機関である「工場（労働者）全権代表者会議」をつくろうという動きが、ペトログラードを初めとして各地で生じていた。[43] メンシェヴィキ（特に右派）とエスエルは、この労働者の運動に深く関与していた。このことも、ソヴィエトからのメンシェヴィキとエスエルの追放に連関していたと見なければならないであろう。六月一三日には「工場全権代表者会議」のメンバーが逮捕された。ペトログラード市ソヴィエトの選挙は七月下旬に行なわれた。前述のように、この選挙では、六・一四決議にもかかわらず、メンシェヴィキとエスエルの参加が認められた。しかし、選挙規程は、議席の多くが共産党の統制下にあった諸機関の代表に属するように改変された。メンシェヴィキとエスエルはこれに抗議し、彼らのうちの多くの者が選挙をボイコットすることを望んだという。コムニストが圧倒的多数を占めたペトログラード市ソヴィエトは、六月二七日、「工場全権代表者会議」を反革命組織として非難し解散させた。この運動を推進してきた労働者たちは、諦めとアパシーに陥っていった（より決然とした部分は、武力闘争を開始したエスエル党のもとに去っていった）。

ブロフキンはまた、当時、共産党と連立政府を構成しながら、対独講和、食糧徴発、ソヴィエトの強制的解散という重要問題でメンシェヴィキ党およびエスエル党と類似した立場をとっていた左翼エスエル党が農村で勢力を目ざましく拡大していたことが、六・一四決議に作用しているという、注目すべき見解を呈示している。[44] 実際、左翼エスエル党は六・一四決議に賛成しなかった。[45] 決議は共産党代表のみによって可決されたのである。なお、周知のように、左翼エスエル党は一八年七月に武装蜂起し、鎮圧され、一部を残して壊滅状態に入る。

復調の兆しを見せていたメンシェヴィキ党の勢力は、ソヴィエトからの追放後は、急速に衰えていった。ペトログラー

ドやモスクワの市ソヴィエトに残っていた同党の代議員たちも、危険分子として絶えず攻撃された。多くの党員の逮捕、新聞の強制的閉鎖、等により、党活動は著しく困難になった。[46] 党内右派は、反政府武力闘争を展開しているエスエル党との同盟を強く主張し、あくまで武力闘争を否定する党指導部との対立を深めた。[47] 他方、共産党へ鞍替えする人々も続出した。[48] メンシェヴィキ党がこの時極度の危機に逢着していたことは確かである。しかし、次章で見るように、そのことのみが一八年末の同党の路線の変更を引き起こしたのではない。

① 《Известия》, № 110, 6 июля 1917 г., стр. 4; Н. Суханов. Записки о революции. Кн. 4. Берлин, 1922, стр. 377; Ascher (ed.), pp. 101-103; Getzler, pp. 155-159. 邦訳、二四九—二五六頁。

② 《Известия》, № 205, 25 октября 1917 г., стр. 4; Рубин, стр. 306-307; Getzler, p. 164. 邦訳、二六二—二六三頁。

③ Ascher, "Russian Marxism...," pp. 393-397.

④ Haimson (ed.), p. 4.

⑤ O. H. Radkey, *The Sickle under the Hammer: The Russian Socialist Revolutionaries in the Early Months of Soviet Rule*, New York—London, 1963, pp. 18-39; Haimson (ed.), pp. 47-53.

⑥ Вардин, стр. 49.

⑦ Haimson (ed.), p. 80.

⑧ *Ibid.*, p. 67.

⑨ Протоколы Центрального Комитета РСДРП(б). Август 1917—февраль 1918. М., 1958, стр. 127.

⑩ Там же, стр. 134.

⑪ 一七年夏まで、リャザーノフはトロツキーらと共にメジライオンツィに、ラーリンはメンシェヴィキ国際派に所属していた。

⑫ Протоколы Центрального Комитета..., стр. 135-136.

⑬ R. V. Daniels, *The Conscience of the Revolution: Communist Opposition in Soviet Russia*, Cambridge, Mass., 1960, p. 69. 国際社会主義運動研究会訳『ロシア共産党党内闘争史』現代思潮社、一九六七年、五七頁。

⑭ Протоколы Центрального Комитета..., стр. 137.

⑮ Там же, стр. 143-145.

⑯ О. Н. Знаменский. Всероссийское Учредительное собрание. Л., 1976, стр. 271-274, 288-289, 357. ただし、ゼゼ尼川が算出。

⑰ Третий Всероссийский съезд Советов рабочих, солдатских и крестьянских депутатов. Петроград. 1918, стр. 35. ヤールムトの発言。

⑱ Первый Всероссийский съезд профессиональных союзов 7-14 января 1918 г. М., 1918, стр. 76-77.

⑲ Там же, стр. 79.

⑳ Haimson (ed.), pp. 102-103.

㉑ Декреты Советской власти, т. II. М., 1959, стр. 430-431.

㉒ Radkey, pp. 60-61; Brovkin, *The Mensheviks*..., p. 20.

㉓ Haimson (ed.), pp. 94 (iv), 381; Brovkin, *The Mensheviks*..., p. 302.

㉛ Протоколы заседаний Всероссийского Центрального Исполнительного Комитета 4-го созыва. М., 1920, стр. 425-426.

㉜ Там же, стр. 431.

㉝ Там же, стр. 422.

㉞ 党中央委員会は、一八年八月二日、地方組織に対し武装蜂起への参加を無条件で禁止する旨の決議を行なった (Haimson (ed.), p. 170. —《Рабочий интернационал》, 7 августа 1918 г. を引用している)。

㉟ これについては Brovkin, *The Mensheviks*..., pp. 256-280 が詳しい。

㊱ *Ibid.*, p. 271.

㊲ 《Социалистический вестник》, № 16 (38), 16 августа 1922 г., стр. 7; Haimson (ed.), pp. 168-169.

㊳ Brovkin, *The Mensheviks*..., pp. 275-276; Haimson (ed.), pp. 173-174. ゲォルガ・ウラル地方委員会はマイスキーを支持した。マイスキーは二一年に共産党側に転向し、外交官として活躍した。

㊴ Рубан, стр. 388. ほかに、例えば Непролетарские партии..., стр. 395-397; Сивохина. Крах..., стр. 195-196 を見よ。

㊵ 和田春樹「ロシア革命に関する考察」『歴史学研究』五一三号、一九八三年二月、六一七頁。

㊶ 中央執行委員会でボクロフスキーは次のように述べている。「中央執行委員会は何よりもまず行政機関」であり、「現在この機関内で、無意識的にではあるが客観的にはソヴィエト政権の敵のために活動しているような分子〔メンシェヴィキ〕の行動を容認することは、包囲された要塞で敵軍の将校を容認することに等しい」(Протоколы заседаний...4-го созыва, стр, 432)。

㊷ Там же, стр. 421. ソスノフスキーの発言。

㊸ Гимперисон, стр. 18.

㊹ Л. М. Малашко. К вопросу об оформлении однопартийной системы в СССР. Минск, 1969, стр. 140, 144. アムーンチェンコによれば、代議員九〇三名のうち、ニイェストとその同調者は五二七名、メンシェヴィキは一〇四名、ヒスエルは九六名であった (Н. М. Алещенко. Московский совет в 1917-1941 гг. М., 1976, стр. 83)。なお、一七年一一月一四日に選出されたモスクワ市ソヴィエトの執行委員会では、ボリシェヴィキは六三名、メンシェヴィキは一〇名 (там же, стр. 28)。

㊺ Малашко, стр. 138-139, 144-145. ポチーヒンによれば、六七七名の代議員のうち、メンシェヴィキは三四名、メンシェヴィキ同調者一名 (М. Н. Потехин. Первый Совет пролетарской диктатуры. Л., 1966, стр. 69)。なお Brovkin, *The Mensheviks*..., pp. 232-249 は、ソ連人研究者とは異なる観点から、ペトログラード市ソヴィエト選挙とその結果を分析している。

㊻ Haimson (ed.), p. 162 を見よ。

㊼ Brovkin, *The Mensheviks*..., pp. 126-176.

㊽ *Ibid.*, pp. 126-160 (especially p. 159).

㊾ これについては Haimson (ed.), pp. 159-160 (いくつかの資料に基づくダーリンの推測) を見よ。

㊿ Brovkin, *The Mensheviks*..., pp. 161-176; Haimson (ed.), pp. 115-125, 135, 147-152, 160, 381; Abramovitch, pp. 151-165. 資料集として М. С. Бернштам (редактор-составитель). Независимое рабочее движение в 1918 году. Paris, 1981 が出ている。

(51) Brovkin, *The Mensheviks*..., pp. 225-227.

(52) Протоколы заседаний...4-го созыва, стр. 426-430, 439-440. 左翼エスエル党代表カレーリンの発言。

(53) Brovkin, *The Mensheviks*..., pp. 254-255, 272-274.

㊼ *Ibid.*, pp. 274-280.

㊽ Getzler, p. 184. 邦訳、二九五—二九六頁。

二　内　戦　期

一八年後半には、内戦はロシアを真二つに引き裂いていた。各地で赤軍と連合国に支援された反政府軍とが激突していた。両者の間で中立的立場をとることなどはもはや不可能であった。さらに、戦争に疲弊したヨーロッパでは、ストと反乱の波が高まり始めていた。[1] そうした状況のもとで、メンシェヴィキ党中央委員会は左の方への軌道修正を行なっていった。一八年一〇月一七—二一日に、中央委員会は、ソヴィエト政府にチェカの廃止と政治的経済的テロルの停止を要求しながらも、一〇月革命が「歴史的に必然的であった」ことを承認し、帝国主義的干渉に対する「ソヴィエト政府の軍事活動の直接的支持」を約束することを明らかにする一連のテーゼ[2]を公表したが、さらに進んで、ソヴィエト体制を「原則」としてではないが「事実」として受け容れ、「自己の闘争の出発点」とすること、憲法制定会議については、それが現在、民主主義革命とは無縁の公然たる反革命の「旗印」、「隠れみの」になっているという認識に立ち、憲法制定議会の要求を当面撤回することなどを明言するようになる。[3] この新路線は一八年一二月末に開かれた党協議会で公式に承認された。新路線を認めないリーベルら右派は、党内での活動を禁じられ、[4] 地下に潜行した。

内戦において孤立し、さらにソヴィエト国家の運営に従事する有能な人材を渇望していた共産党はこのメンシェヴィキ党の路線変更を一応歓迎し、一一月三〇日、全露中央執行委員会は六・一四決議のうちメンシェヴィキ党に関する部分を（依然としてブルジョアジーと同盟しているメンシェヴィキを除くという条件つきで）無効とした。[5] 即ち、メンシェヴィキ党はソヴィエトへの復帰を許されたのである。

因みに六・一四決議がエスエル党に関しても条件つきで廃止されるのは一九年二月一九日のことであるが、[6] 実際にこれに該当したのは、共産党側に歩み寄って一八年一〇月末にエスエル党から離脱したヴォリスキーらの「エスエル少数派党」[7]

だけであった。エスエル党指導部は、一八年一一月中旬のウファ執政府内でのコルチャーク提督のクーデターののちは、ブルジョア・地主勢力と共産党独裁の双方と闘うことを基本戦略としていた。同党の指導者にとって、共産党は歴史的に進歩的な勢力ではありえなかったのである。[8]

ソヴィエトへの復帰を許されたのちも、メンシェヴィキ党は共産党政権の諸政策に対する批判をやめようとはしなかった。共産党とメンシェヴィキ党との懸隔は依然として大きかった。メンシェヴィキ党は、革命の成果を維持し経済を再建するという点ではソヴィエト政権（共産党政権）を支持するが、ロシアへの社会主義の即時導入には反対し続け、一八年夏より実施されていた、のちに「戦時共産主義」と呼ばれることになる経済政策体系を批判し、官僚主義を非難し、ソヴィエト憲法の枠内での政治的自由を強く要求していた。[9]

白衛派との激闘のさなかにあった共産党には、メンシェヴィキの主張と行動は許し難いものに見えた。特にメンシェヴィキがマルクス主義的言辞を用い、労働者階級の代弁者として体制を批判したことは、共産党を苛立たせたであろう。レーニンは、メンシェヴィキおよび彼らを支持する社会層は小ブルジョアであるときめつけただけでなく、しばしば「資本主義の手先・従僕」「売春婦」「詐欺師」「社会主義の最も悪質な敵」というような極めて刺激的な言葉[10]を用いて、メンシェヴィキを攻撃している。『レーニン全集』に書き留められている彼の言説のなかには、メンシェヴィキ党が右派を切り離してソヴィエト体制の方へ移ってきたことに対する評価は殆ど見当たらない。彼はソヴィエト体制内に入ったメンシェヴィキ党と、体制外の、例えばエスエル党、グルジアのメンシェヴィキ党などとの間に殆ど何の差異も認めようとしなかった。[11]

レーニンは、個々のメンシェヴィキ党員がソヴィエト政府に批判的な政治活動を完全にやめてソヴィエト諸機関（政府諸機関）内部での「実務」に専念することに期待をかけていたようである。[12] 一八年一一月二七日、即ちメンシェヴィキ党の合法化の三日前、レーニンはモスクワ党活動家会議で「小ブルジョア民主主義派に対するプロレタリアートの態度」に

ついて演説し、そのなかで次のように述べている。「現在では、実際上、メンシェヴィキ党およびエスエル党と協調する可能性が少しでもあるとは私は考えない」が、「わが国では、扇動家には滅多にこと欠かないけれども、実地の指導者、組織者には甚だしくこと欠いている」ので、「沢山の仕事をする能力をもっている小ブルジョアをつかまえ」る必要がある。彼らには次のようにいおう。「我々の与える課題を遂行し給え。もし諸君がそれをしないなら、我々の手には非常委員会〔チェカ〕の全機構が残されていることを知り給え」と。[13]

実際、ヒンチェーク、マルトゥイノフなどの著名なメンシェヴィキ党員がソヴィエト諸機関内部で活動する道を選んだ(彼らの多くはのちに共産党員になった)。ダンとマールトフにも、それぞれラーリンとラデックから最高国民経済会議の副議長などとして働くよう非公式の誘いがあった。[14] 政治的批判の自由に固執するダンとマールトフはこれを断った。

メンシェヴィキの政治活動のなかで最も嫌疑を受けたのはスト扇動である。当時、ソヴィエト政府がスト扇動を重大な犯罪と見なしていたであろうことは容易に想像できる。しかし、合法化後のメンシェヴィキによる労働者スト扇動については、スピーリンらによってしきりに強調されているが、[15] それについての詳細な説明は全くなされておらず、典拠も記されていない。しかし、レーニンが述べているように、反革命との闘争のさなかに共産党を批判し、特にそれを印刷物のなかで公表するという行為自体が、労働者のストを引き起こしかねないものとして咎められたのである。[16]

内戦が激化するにつれてメンシェヴィキ党に弾圧が加えられた。即ち、党中央委員や労働組合幹部を含む党員の逮捕、拘置、釈放の繰り返し、ソヴィエト選挙への参加に対する妨害、新聞の発刊停止、等である。[17] ダンは、のちに、この「迫害政策」は「概して首尾一貫したものではなく、弾力性を欠いたものでもなかった」と述べている。[18] しかし、それは弱体なメンシェヴィキ党の活動にかなりのダメージを与えたようである。メンシェヴィキを特に憤激させたのは、諸ソヴィエトの選挙の直前にメンシェヴィキを大量逮捕するという当局のやり方であった。[19]

共産党の側から冷たくあしらわれ、「半合法的存在」[20]にされながらも、メンシェヴィキ党指導部は、新路線の基礎とな

る「過渡期」理論――ロシアはいまだ社会主義の段階にはないが、社会主義への移行は、勤労階級（勤労農民を含む）の権力、即ち民主主義を基礎とする全社会主義党派の連立政府のもとでの漸進的な進化の過程としても可能であるという理論――をリファインしていった。[21]

一九年七月一二日にメンシェヴィキ党中央委員会が「すべての男女労働者にむけて」公表した『何をなすべきか』[22]は、党の綱領的文書であった。それは次のような文で始まっている。

「コルチャーク、デニーキン、ユデーニチ、連合国の帝国主義者たち」という「外部の敵」と「飢餓、品不足、燃料の欠乏、あらゆる製品の価格の恐るべき騰貴、労働者大衆の絶望とアパシー、都市の貧民と農民の憤激」という「内部の危難」からロシア革命を救うには何をなすべきか。反革命軍から自己を守るためには、経済政策を根本的に変更し、軍隊への食糧補給と軍隊の輸送、また闘争への労働者と農民の積極的参加を阻害している「経済崩壊のプロセスと勤労者の状態の悪化」を食い止めなければならない。

同時に、「軍事的課題」と「経済的課題」を解決するためには、「政治問題」を正しく提起し解決する必要がある。現体制下では全権力は、全住民の少数部分を組織し、無権利の状態に置かれている大衆の側からのいかなる真の統制もないまま統治し、広範なテロルに頼っている単一の党の手中にある。このような体制は軍事防衛問題を十分解決することも、国家の崩壊と首尾よく闘うこともできない。この体制は、地方では革命に取り入った出世主義者の支配と少数の労農グループの特権を創出した。彼らは他の労働者と農民を「無権利な家臣」のように見始めている。この体制は全機関を、人の能力よりは従順さを評価する無能な官僚でみたしている。

第一に解決すべきは「軍事的課題」である。「勤労者の権力と革命の獲得物」の保持、食糧と原料の獲得、連合国の封鎖の解除のために、総力をあげて反革命の大軍を撃退しなければならない。しかし、それだけでは十分ではない。反革命軍が農民や労働者やコサックを糾合して再び攻撃をしかけてくることがないようにしなければならない。大衆の多くは政

治参加の機会を奪われている。ロシアの経済崩壊と労働者階級の状態の悪化を阻止し、労農同盟を復興させ、大衆の革命への信頼を回復させ、革命ロシアの戦闘能力を高め、反革命に対し勝利を収め、内戦の終結に導くであろう、次の一連の措置を意識ある労働者に提案する。

「経済の分野」では、

㈠「農民に対し、彼らが革命期に奪取し分配したすべての地主所有地および国有地を、彼らが自由に定めた集団的または個人的方法で確保させる」。現在模範的な大規模経営が可能な土地を除き、その他のまだ分配されていない土地を、それを必要とする農民や農民協同組合に長期賃貸する。一切の貧農委員会を完全に廃止し、公然隠然の農業コムーナの強制的設置をやめ、国家が有する農具と種子をコムーナだけでなく、それを必要とする農民にも公平に分配する。

㈡食糧システムについては、国家は「合意価格により、また広範な直接的商品交換を適用して」穀物を買い上げる。穀物は都市と農村の貧民には安く売られ、差額は国家が支払う。国家は穀物購入を「自己の代理人、協同組合および私的商人を通じて」行なう。富裕な農民の余剰穀物の一定部分は生産原価により徴集される。その分量は「自由に選出された地方農民代表の参加のもとで」定められる。「すべての闇食糧買出取締部隊は廃止される」。

㈢基本的な大工業企業は「国家の手に保持される」が、生産の改善が見込まれる場合には、「国家資本と私的資本の結合、国家の統制下での強制トラスト化」によって、また特別の場合には「利権方式」に基づいて私的資本が適用される。他の大工業施設は、特別のものを除き、生産の復興と組織化を義務づけられた協同組合や企業家に貸し出され、原則として漸次私営化される。

㈣「小工業の国有化は完全に廃止される」。

㈤国家は「協同組合と私的商業機関」を引き入れつつ、最も重要な大衆的日用品を地域間で計画的に配分する。

㈥〜㈧（略）

(九)「労働組合は調整に参加する機関であるが、それと同時に、そしてまず第一に国家と私的企業家に対するプロレタリアートの利益代表機関である。後者の活動においては労働組合は国家諸機関から完全に独立する」。

(一〇)国家的企業における賃金率を引き上げ、私的企業での最低賃金を定める。

(一一)協同組合は、任命等の干渉を受けぬ自治組織として保持される。協同組合には出版等の文化活動の権利が確保される。

「政治の分野」では、

(一)「すべての男女勤労者を加えてソヴィエト選挙権を拡大する。秘密投票、口頭および印刷物での扇動を保障された、全勤労者のための、都市と農村のソヴィエトの自由選挙を行なう」。ソヴィエトと執行委員会の正確な定期的改選を行なう。ソヴィエトは政治的理由によって個々の代議員およびグループ全体を自己の内部から除名する権利をもたない。すべての公務員と公的機関は、地方ソヴィエトと中央執行委員会に服従する。

(二)「最高立法・管理機関としてのソヴィエト中央執行委員会」の活動を復興させる。それが審議、採択しない法律は効力を有しない。

(三)「出版・集会・結社の自由を復興する。勤労者によって形成された各政党は、集会場、紙、印刷所、等を利用する機会と権利を与えられる」。「反革命との軍事的闘争によるこの分野での制限」は、法的に定められなければならない。

(四)革命裁判所を再組織し、「支配のシステムとしてのテロル」、死刑、非常委員会を廃止する。

(五)「すべての党機関および細胞から国家権力機関のあらゆる権能を剝奪し、党員からあらゆる物質的特権を剝奪する」。

(六)地方自治を発達させて官僚機構を簡素化する。

(七)可及的速やかに内戦を停止し、民族自決に基づく国家的統一の再建のため、ロシアから引き離された民族に対し協調政策をとる。コサックの諸地域とシベリアに自治を与え、フィンランドとポーランドに独立を認める。

最後に、堅固な革命的統一戦線（共産党とエスエル党を含む）を形成し、上述の措置を実施して、ロシア革命を内外の敵、

「反革命」と「飢餓の骨張った手」から救おう、という呼びかけで、この文書は終っている。

この『何をなすべきか』については、レーニンは著述や演説のなかで一切言及していない。ソ連の比較的詳しい研究書のなかにはこの文書にいくらか言及しているものがあるが、この文書で述べられているような諸方策が実施されたならば、プロレタリアートの独裁は崩壊し、ブルジョアジーと地主の権力が復活したであろうとの評言を加えることを忘れない。[22] 一九八四年に刊行された『ロシアの非プロレタリア政党』は、さらに、メンシェヴィキは「ソヴィエト社会におけるボリシェヴィキ党の指導的役割を否定した」[23]ということを特に指摘している。

『何をなすべきか』のなかで挙げられている諸方策が実施されたならば、確かに共産党の一党支配体制としての「プロレタリアートの独裁」は「戦時共産主義」的経済政策と共に崩壊したであろうし、資本主義的要素がかなりの程度に復活したであろう。しかし、ブルジョア＝地主権力はそう簡単に復活したであろうか。憲法制定議会選挙でのカデット党の得票にも示されているように、ブルジョアジーには大衆的支持はなかった。大地主の復帰など、果してどれほどの農民が望んでいたのか。エスエル党多数派にしても、コルチャークのクーデター後のこの時点では、共産党独裁政権とその政策に激しい敵意をもっていたとはいえ、ブルジョア＝地主勢力にも公然と対抗していたのである。連合国の帝国主義勢力にしても、もしロシアでメンシェヴィキが構想していたような体制が成立していたならば、干渉の大義名分を大いに失ったであろう。ソ連史学の主張には再検討の余地がありはしないか。

「プロレタリアートの独裁」という語にも注意する必要がある。ロシアのプロレタリアート即ち労働者階級は崩壊に瀕していた(我々は、これが共産党の政策と無関係だとは思わないのだが)。この当時のレーニンらのいう「プロレタリアートの独裁」は、「実質的にはプロレタリアートの組織された、自覚した少数者の独裁」[24]であった。一九年七月末、レーニンは一党の独裁を非難する人々に対し、「そのとおり、一党の独裁だ！　我々は一党の独裁のうえに立っているし、この基盤から離れるわけにはいかない。なぜなら、この党は、数十年の間に全工場プロレタリアート、産業プロレタリアートの前衛

という地位をかちえた党だからである[28]」と応答している。翌年の末、彼は「プロレタリアートの一人残らずの組織化がプロレタリアートの独裁を直接に実現することは不可能」であり、「独裁を実現できるのは、階級の革命的エネルギーを吸収した前衛だけである[29]」（ただし、若干の「伝導装置」を通じて独裁を実現する）と述べている。二三年の第一二回党大会（レーニンは不参加）の決議は、「労働者階級の独裁は、その前衛、即ち共産党の独裁という形態以外には確保されえない[30]」と宣言した。のちにスターリンは、「プロレタリアートの独裁は、実質的にはプロレタリアートの前衛の『独裁』であり、プロレタリアートの基本的な指導力としての、彼らの党の『独裁』であるといってさしつかえないであろう[31]」（強調はスターリン）と、また「プロレタリアートの独裁は、一つの党、即ち共産党に指導される場合に、初めて完全なものとなりうる。この党は、他の諸政党と指導権を分かたないし、また分かってはならない[32]」と言明した。

スターリン批判後、ソ連史学は「プロレタリアートの独裁」と「共産党一党の独裁」とを同一視し、「プロレタリアートの独裁」のもとでの他党の存在を頭から否定するような立場からは離れた。しかし、「共産党の指導的役割を認めること」が、「プロレタリアートの独裁」下での共産党以外の政党の存在の条件であるという線は譲っていない[33]。確かに、そのような条件をもち出すならば、メンシェヴィキ党がそれに完全に合致してはいないことは明らかであろう。同党が原則上「共産党の指導的役割」を承認していたようには見えない。同党は反革命に対して共産党体制を支持しながらも、その諸政策に重大な危険性を見ていた。メンシェヴィキ党は、できうるならば、ソヴィエト憲法の枠内で、ソヴィエト選挙を通じて共産党と自由に競い合うことを望んでいたであろう（もっとも、この一九年の時点では、メンシェヴィキ党の強調点は、むしろ、反革命に対抗する統一戦線の形成に置かれていたように見えるのだが）。共産党はそれを認めなかったのである。

さらに、当時、メンシェヴィキは、ヨーロッパの社会主義への移行という認識のうえに立って、『何をなすべきか』で挙げられている諸方策を提示していたということが、考慮されなければならないであろう。

一八年一一月に勃発したドイツ革命は、ロシアのマルクス主義者たちを狂喜させたが、社会主義革命としては挫折した。

しかし、こののち、ドイツについての正確な情報を得ることのできなかったロシア共産党は、ロシア革命の経験をドイツに投影しつつ、あらたな革命の大波がドイツに訪れるであろうことを予想していた。ドイツにおける社会主義革命の展望についての疑念が、レーニンやトロツキーなど共産党指導者たちの胸をよぎらなかったわけではない。しかし、そのような疑念が、ドイツ、そして西欧は社会主義革命の間際にあるという、熱い期待と予想を圧倒するのは、まだ先のことであった。[32]

メンシェヴィキもまた、ヨーロッパが社会主義に至る転換期に入ったと信じていた。コムニストが、ドイツ革命は先達たるロシア革命のコースをそっくりそのまま辿るであろうと期待していたのに対し、メンシェヴィキの方は、世界革命運動のヘゲモニーがドイツに移り、社会主義の概念についてメンシェヴィキと基本的見解を同じくしているであろうドイツ革命の指導者たちのもとで形成されるドイツ・プロレタリア国家が、ロシアのコムニストの「行き過ぎ」、社会主義の歪曲を正してくれるであろうことを待望していた。[33] そのような相違はあったが、メンシェヴィキもまた前方にあらたな地平が開けるのを感じて行動を起こしたのである。一九年から翌年にかけて、メンシェヴィキ党は第二インターと絶縁し、ドイツ独立社会民主党、フランス社会党などと共に、「日和見主義的な」第二インターとも、「セクト主義的な」第三インター（コミンテルン）とも異なる新インターの結成をめざした。[34] この新インター[35]は二一年二月末に結成されたが、ヨーロッパ革命運動の退潮のなかで二年後には消えてしまうことになる。しかし、ドイツ革命勃発後のかなりの期間、メンシェヴィキは、世界が社会主義への過渡期に入ったと信じていたのである。『何をなすべきか』で提案されている諸方策は、この文脈のなかで捉える必要があろう。[36]

一九年末には、マールトフは「少数者の独裁」の不可避性すら承認するようになった。西欧での革命運動の状況が具体的に明らかになるにつれて、マールトフはロシアでの革命の展開過程が西欧でも繰り返えされると考えるようになった。経済は極度に疲弊し、勤労者の一部はまだ軍隊にいて生産から引き離されており、「階級闘争の学校を通過していない」

新大衆が工業をみたしている。革命運動で積極的な役割を演じているのは、単一の階級的利害によって緊密に結合されていない大衆を代表している、解体しつつある軍隊の兵士たちである。これらの点で一九年末のヨーロッパの状況は一七年のロシアに似ている、とマールトフは見るのである。[37]

一九年一二月には、彼は次のように書いている。「内戦の局面に入りつつある階級闘争においては、……大衆の意識に先んじた、革命的階級の前衛が、革命的少数者の独裁の形態で国家権力を実現することを余儀なくされる時が来ざるをえない。愚鈍な空論のみが、このような展望を拒みうるであろう」[38]と。

しかし、マールトフのいう「革命的少数者の独裁」は、コムニストが現に行なっている独裁を意味してはいなかった。「全問題は、どの革命においても一時的に不可避であるこの少数者の独裁をどのように実現するかということである。それを社会の長期的な状態に転化することを保障する諸機構の網を強化したり創出したりすることを目的とするのか、それともそれを可及的速やかに革命的階級ないし革命的諸階級全体の自主活動と自主管理に代えることを目的とするのか」。無論、前者が「コムニストの方法」であり、後者こそが「革命的マルクス主義者の方法」である、とマールトフはいうのである。[39] コムニストとの相違を際立たせながらも、マールトフは、このように「革命的少数者の独裁」の不可避性を認めるところまでいったのである。

二〇年四月に開催されたメンシェヴィキ党協議会の、恐らくマールトフによって起草された一決議「世界社会主義革命と社会民主党〔メンシェヴィキ党〕の任務」には、「革命的少数者の独裁」の思想は明確には現われてはいない。しかしこの決議は、「支配の軍事的物質的手段を有している支配的資本家的少数者は、勤労者の手中への国家権力の移行に抵抗するであろうから、この政治革命は、ブルジョア社会の国家諸機構の枠内でのプロレタリアートの合法的闘争の手段によっては完遂されえない。従って、権力なき多数者が、権力をもつ少数者を力で打倒する準備と能力が、社会革命の必須条件なのである」と述べている。ロシアのようにプロレタリアートが少数である国々における当面の目標は「プロレタリアート

と他の勤労諸階級による権力の分割」であり、その際、「指導的役割」はプロレタリアートに確保される（ここで「革命的少数者の独裁」が示唆されているように思われる）。そして、「この権力の分割は、今後の国際的規模での経済的発展がこれらの国々でプロレタリアートの独裁の前提をつくり出すまでの過渡的歴史的時期の内容をなす」のであった[10]。

二〇年四月の時点では、世界が社会主義への移行の中間期にあり、それゆえロシアも漸進的にではあれ社会主義への移行を展望しうるというマールトフの考えには、メンシェヴィキ党内でも強力な反対論があり、また、マールトフ自身も同年末までには西欧革命の進展についてかなり悲観的な見解を抱くようになる[11]。とはいえ、一八年末以降のかなりの時期、世界は社会主義への過渡期に入ったという観念がメンシェヴィキ党を捉えていたのであり、一九年の『何をなすべきか』も、そうした情勢認識のうえで提起されたものであると見るべきであろう。ソ連史学は、このような点については、殆ど全く言及していないのである。

いま一つ、いわなければならないことがある。『何をなすべきか』で提案されている経済的諸方策は、二一年に共産党が採用せざるをえなかった「新経済政策」（ネップ）と基本的に等しいものであった。ソ連人研究者たちは、このことを全く無視している。

① メンシェヴィキ党中央委員会が一八年一〇月に発表したテーゼは、「世界の隅々で人民大衆の反乱のかまどが燃え立っており」、この反乱は「プロレタリアートと資本主義社会との全面的な闘争へと、社会プロレタリア革命へと向かっている」と述べている（Вардин, стр. 99–100 に引用されている）。

② См. В. И. Ленин. Сочинения. Издание третье, т. XXIII, 1935, стр. 571–572 (прим. 79); Вардин, стр. 99–100.

③ Партийное совещание Р.С.-Д. Р. П. 27 декабря—1 января 1919 г. (резолюции). М., 1919, стр. 23–25.

④ Там же, стр. 27–28. グルジア・メンシェヴィキ党批判も明記されている（стр. 27）。

⑤ Декрет Советской власти, т. IV. М., 1968, стр. 96–97.

⑥ Там же, стр. 436–437.

⑦ К. В. Гусев. Партия эсеров: от мелкобуржуазного революционаризма к контрреволюции, М., 1975, стр. 320–326; Schapiro, pp. 161–164.

⑧ チャルノフについては J. Burbank, *Intelligentsia and Revolution: Russian Views of Bolshevism, 1917–1922*, Oxford—New York, 1986,

pp. 69–85 (especially pp. 81–82) を見よ。

⑨ 路線を変更した一八年末の党協議会決議（Партийное совещание ...）のなかにも、こうした批判と提案が至る所に記されている。

⑩ 例えば В. И. Ленин. Полное собрание сочинений, т. 38, стр. 63–65, 168.（第四版の）邦訳『レーニン全集』大月書店、第二九巻六六—六八、一七〇頁。

⑪ M. Liebman, *Le Léninisme sous Lénine*, t. 2, Paris, 1973, pp. 89–90 を参照。

⑫ *Ibid.*, p. 87 を参照。

⑬ Ленин, Полн. собр. соч., т. 37, стр. 225, 227, 228, 232–233. 邦訳、第二八巻二二八、二三〇、二三二、二三六頁。また там же, т. 38, стр. 254. 邦訳、第二九巻二五九頁も見よ。

⑭ Haimson (ed.), pp. 210–211.

⑮ 例えば Спирин. Классы..., стр. 308–309; Непролетарские партии ..., стр. 466–467.

⑯ Ленин. Полн. собр. соч., т. 38, стр. 291. 邦訳、第二九巻二九二頁。

⑰ J. Martow / T. Dan, *Geschichte der russischen Sozialdemokratie*, Berlin, 1926, S. 317–318.

⑱ *Ibid.*, S. 318.

⑲ T. Dan, *Gewerkschaften und Politik in Sowjetrußland*, Berlin, 1923, S. 24. ダンは、このほか、市ソヴィエトからの排除や選挙参加妨害などの様々な例を挙げている (S. 24–25)。

⑳ Martow / Dan. S. 318.

㉑ Haimson (ed.), pp. 187–189.

㉒ Сборник резолюций и тезисов Центр. К-та Р. С.-Д. Р. П. и партийных совещаний. Харьков, 1920, стр. 33–43 および Социал-демократия и революция. Одесса, 1920, стр. 9–16 に収録。なお、この文書の英訳は、Ascher (ed.), pp. 111–117 に、独訳は *Sozialistische Revolution...*, S. 79–85 にあるが、いずれも結びの部分が欠落している（省略か？）。

㉓ Спирин. Классы..., стр. 308; Непролетарские партии..., стр. 468; Рубан, стр. 394. なお Вардин, стр. 107–110 では政治的方策のみが紹介され批判されている。

㉔ Непролетарские партии..., стр. 468.

㉕ Ленин. Полн. собр. соч., т. 41, стр. 236. 邦訳、第三一巻二二八頁。これ自体はタナーの言葉。続いてレーニンは「その少数者は、実質的には党である」(стр. 237. 二二八頁) と述べている。

㉖ Там же, т. 39, стр. 134. 邦訳、第二九巻五四九頁。

㉗ Там же. т. 42, стр. 204. 邦訳、第三二巻五頁。

㉘ Двенадцатый създ РКП(б). Стенографический отчет. М., 1963, стр. 672.

㉙ И. В. Сталин. Сочинения, т. 8, стр. 37. 邦訳『スターリン全集』大月書店、第八巻五五頁。

㉚ Там же, т. 10, стр. 99. 邦訳、第一〇巻一一七頁。

㉛ 高岡健次郎氏の前掲二論文、また例えば К. В. Гусев. Крах партии левых эсеров. М., 1963, стр. 91–93. 高岡健次郎『左翼エスエル党の崩壊』、自馬書房、一九七八年、八九—九〇頁を見よ。

㉜ Ascher, "The Russian Marxism...," pp. 403–415, 422–432.

㉝ *Ibid.*, pp. 416–417; Партийное совещание..., стр. 11–13.

㉞ 二〇年三月に党協議会が採択した「インターナショナルについての決議」(Социал-демократия и революция, стр. 36–38) を見よ。

㉟ 「社会主義政党国際行動同盟」。通称「ウィーン・インターナショナル」。コムニストたちは「第二半インターナショナル」と呼んだ。

㊱ 一八年二二月の党協議会は、既に先進国革命との関連でロシアの社

会主義への移行を考えていた（Партийное совещание..., стр. 12）。

㊲ Ю. Марков. Диктатура и демократия.—《За год》, Петроград, 1919, стр. 35–38. 以下は Ascher, *Pavel Axelrod*..., pp. 349–380 を参考にした。

㊳ Социал-демократия и революция, стр. 49.

㊴ Там же.

㊵ Там же, стр. 27.

㊶ Haimson (ed.), pp. 215–217.

三　内戦の終結からメンシェヴィキ党の崩壊まで

内戦は二〇年初頭までに赤軍の勝利のうちにほぼ終結した。しかし、同年を通じて共産党政権は、内戦中の強硬な諸政策、即ち、農民に対する食糧徴発、自由商業の禁止、工業企業の国有化、労働組合の国家機関化、等を緩めることなく続行ないし強化した。内戦を勝利に導いた軍事的中央集権的方法が、社会主義をめざすソヴィエト共和国の経済再建にも有効であると見なされたのである。これらの政策は、大衆の現実的利益への配慮や自主活動促進の観点を欠き、苦境のなかで多大な犠牲を強要するものであったといえよう。

二〇年ごろの労働者と農民の状態についてここで詳述する余裕はない。ただ、当時の共産党政権側の経済学者クリッツマンの次のような記述を引用するにとどめたい。「一九一九—二〇年のロシアの労働者の生活水準は、戦前のそれの少なくとも三分の一にまで低下した。……飢えと寒さ、病気と死、肉親の眼前での子供たちの餓死が、この数字の背後に隠されている」[1]（強調はクリッツマン）。大衆は、やがて公然と不満を表明し始める。

二〇年の前半、「戦時共産主義」の続行と強化にもかかわらず、メンシェヴィキ党に対する弾圧は緩和された。この弾圧の緩和は、無論内戦が概ね終結したことに関連していたであろう。しかし、それと同時に、内戦中の——赤軍に党員を動員もした[2]——メンシェヴィキ党の行動が、共産党側にそれなりに評価された結果であると考えることはできまいか。メンシェヴィキが単に「口先だけ」左傾し、実際には反革命的行動をしていたのであったら、弾圧の緩和などありえなかったはずである。

二〇年の前半、メンシェヴィキは市ソヴィエトや労働組合でかなりの支持を得ることに成功したようである。ダンは、この時期に実施された市ソヴィエト選挙で、メンシェヴィキ党が、モスクワで四六名、ハリコフで二〇五名、エカテリノスラフで一二〇名、クレメンチュークで七八名、トゥーラで五〇名、スモレンスク、オデッサ、ポルタワ、キエフ、イルクーツクで各々三〇名の代議員を出したと述べている。[3]

西独の研究者アンヴァイラーは、有名な著書『ロシアにおけるソヴィエト運動』のなかで先のダンの記述に触れ、「この、いくつかは驚くほど高い数字を、他の文献によって点検することはできなかった」[4]という脚注を付している。我々もまたこの時期の市ソヴィエトの党派別構成についての詳細な資料を見出していない。しかし、右に挙げた数字は、六月末にマールトフがエヴァ・ブロイドに送った手紙のなかの数字と完全に合致している。[5]

また、この数字は、メンシェヴィキ党のウクライナ本部委員会が二〇年四月に出版した、党中央委員会決議集の序文に記されているいくつかの市ソヴィエトについての数字（トゥーラは五〇名、スモレンスクは二〇名、クレメンチュークは七一名〔コムニストは六二名〕、ハリコフは二〇〇名）ともほぼ一致している。ハリコフ市ソヴィエト選挙では労働者地区とすべての大工場でメンシェヴィキが多数を占め、「プロレタリアートの注意」がメンシェヴィキ党に向き始めたということが述べられている。[6]

さらに、『レーニン全集（第五版）』第五一巻の編集部注には「一九二〇年二月後半―三月初めに行なわれたモスクワ・ソヴィエト選挙では、一五六六名の代議員が選出され……メンシェヴィキは四六名（三%）であった」[7]という記述がある。ここでの数字も合っている。マールトフとダンは、この時モスクワ市ソヴィエトの代議員に選出された。[8]

二〇年四月に開かれた第三回全露労働組合大会では、代議員一六〇〇名のうちメンシェヴィキは五七名であった。[9]

右に挙げた市ソヴィエトや全露労働組合大会の代議員数だけを見れば、メンシェヴィキの成功はさほど大きなものには見えないかもしれない。しかし、弾圧が完全になくなっていたのではないことを考慮しなければならない。マールトフは、

「我々が候補を立てることのできた所ではどこでも、扇動の自由がなかったにもかかわらず、我々の候補者は勝ったのです」[10]と誇らしげに書いている。メンシェヴィキ党は、共産党の諸政策に不満を抱く労働者の支持を得て、共産党にとって侮り難い勢力に成長しつつあったのではなかろうか。

再び弾圧が強められたのは六月からである。その引金となったのは、五月二一日、メンシェヴィキが幹部の大半を占めていた印刷工組合が組織した三〇〇名の労働者の集会(この種の集会の最後のもの)で、チェカに追われていたエスエル党指導者チェルノフが不意に登場して演説し、それと気づいたコムニストたちの「逮捕せよ!」との叫びにもかかわらず、混乱のなかを逃げおおせた事件である。[11] この集会にはイギリス労働党代表団の一部の者も訪れており、ソヴィエト政府は面目を失ったわけである。

政府は直ちにこのような不祥事を防止する措置を講じた。共産党モスクワ委員会は、『プラウダ』で、「メンシェヴィキは、労働者集会の名で、ロイド=ジョージ一派にソヴィエト政権への中傷にみちた密告を行ない、ソヴィエト・ロシアに対する封鎖と戦争〔の再開〕を正当化した。即ち、彼らは、世界の資本家的略奪者と、我々を攻撃している白衛派のポーランドを援助したのだ」[12]と声明した。こののち、大規模な弾圧がなされた。ダンはモスクワを追われ、やはりメンシェヴィキ党の指導者であったアブラモヴィチは、政府の側から圧力を受けた、彼の選挙人たちによってソヴィエトからリコールされたという。六月中旬、多数のメンシェヴィキが逮捕された。[13]

共産党モスクワ委員会の声明に出てくる「白衛派のポーランド」との戦争についての共産党とメンシェヴィキ党との対立も、弾圧の一要因であったと考えてよいであろう。四月末にポーランドが国境を越えてソヴィエト・ロシアに侵入し、キエフを攻撃していた時点では、これがロシアにとって防衛戦争であることを疑う者はなかった。エスエルはモスクワ市ソヴィエト議長団にその旨の手紙を送ったし、旧軍の将軍のなかにさえ赤軍勤務を志願する者がいた。メンシェヴィキ党は党員の動員を宣言した。しかし、マールトフは、レーニンらの言説から、赤軍がポーランド軍を撃退したのち、さらに

西方へ進撃し続け、ワルシャワを占領し、ドイツに突入し、協商国との闘争を再開するであろうと見ていた。メンシェヴィキ党は、純粋な防衛戦争は支持するが、他国への軍事的攻撃には賛成しないと宣言した。[14] 党中央委員会が八月の党協議会のために作成した外交についてのテーゼには、次の一節がある。「諸外国に社会革命を持ち込む手段としての侵略的革命戦争は、社会民主党〔メンシェヴィキ党〕には原則として受け容れられない。その〔戦争〕目的は、プロレタリアートがまだ国家権力を掌握しておらず、その運動が内戦の性格をいまだ帯びていない諸国における階級対立の発展を人工的に強要することだからである」。[15] このような批判は、世界革命への期待に燃えていたロシア共産党側にとっては、許容し難いものであったろう。

八月にはまたメンシェヴィキ党員の大量逮捕が行なわれ、[16] 以後、同党は、形式上は非合法化されなかったものの、実質的な政治活動を行なうことが極めて困難な状態に陥った。

もっとも、共産党は弾圧一本槍であったのではない。二〇年九月、マールトフは、ロシアに心を残しながらも、西欧の、志を同じくする社会主義者と協力して運動を展開するため、国外に出ようとしたが、共産党は、激論の末、かつて彼と親しかったレーニンの主張により、これを許可した。[17] マールトフはメンシェヴィキ党在外代表団の指導者となり、二三年四月に死ぬまで、ドイツに滞在した。

また、二〇年一二月末に開かれた第八回ソヴィエト大会では、エスエル少数派党のヴォリスキー、左翼エスエル党のシテインベルクと共に、メンシェヴィキ党のダンとダーリンが、それぞれ一回発言することを許されている（表決権はなし）。[18] 特にダンは、議長と代議員の要請でもち時間を大幅に延長され、ソヴィエト制度の麻痺、強制に基づく食糧政策、等について鋭い批判を加えた。[19] ダーリンは、この大会で提起された、農民に対する播種強制によって農業生産を回復させようという共産党案を批判し、農民に、彼らの手元に残る余剰を処理する自由を与えるべきだと主張している。[20] 二人の主張はこの大会では受け容れられなかったのであるが、ともかくメンシェヴィキ党の代表は、全露ソヴィエト大会で演説しえたの

である(これが最後であった)。

メンシェヴィクのドヴィノフは、一九六八年に刊行された著書のなかで、「わが党に対する〔共産党〕政権の二面的な、確信なき政策」は、恐らく農村と都市における共産党の政策の行き詰りと、そこから生じる党内対立(いくつかの党内反対派の発生)によって説明される、と述べている。[21] 共産党の内部対立との関連についてはまだまだ考察が必要であろうが、傾聴すべき意見である。

二一年春、共産党は極めて厳しい事態を迎えた。既に前年の後半より各地で広がっていた農民反乱に加え、三月にクロンシュタット反乱が勃発するが、その直前、二月中旬―下旬にモスクワで、二月下旬―三月初めにより大規模にペトログラードで、労働者のストとデモの大波が生じている。彼らは、食糧配給量の増額、穀物徴発の廃止、穀物の自由取引の許可、靴と防寒衣類の発給、等の経済的要求にとどまらず、獄中の社会主義者の釈放、全労働者への言論・出版・集会の自由、工場委員会・労働組合・ソヴィエトの自由選挙、等の政治的要求をもち出していた。ストとデモは自然発生的なものであったが、逮捕を免れていたメンシェヴィキが自分の主張を印刷物によって労働者に訴え、相当の影響を与えたと推測されている。[22] ただし、ダンは労働者たちが集会にユダヤ人弁士を招くのを嫌ったということを述べており、これが、指導部にユダヤ人を多数包含していたメンシェヴィキ党の活動にとって一つの障害となっていたことを仄めかしている。[23] なお、エスエルもまた「共産党を打倒せよ!」というような、メンシェヴィキよりも好戦的かつ非妥協的な主張をもってストを激励したようである。[24]

労働者の抗議運動は一連の譲歩と抑圧によって終息した。飢えに消耗しきっていた労働者たちは、もはや運動を持続させることはできなかった。[25]

既に二月八日の時点でレーニンは食糧税の導入と自由取引の容認を党中央委員会政治局に提案していたのであるが、[26] 労働者のストとデモ、それに続くクロンシュタット反乱は、「戦時共産主義」の破綻をロシア共産党に思いしらせた。共産

党政権は「戦時共産主義」を放棄し、ネップへと方向転換せざるをえなかった。ネップは、前述のように一九年に出されていたメンシェヴィキの『何をなすべきか』の経済的諸方策とほぼ同一のものであった。他方、『何をなすべきか』で提起されていた政治的諸方策は全く考慮されなかった。大衆の反乱（レーニンはこれを「小ブルジョア的反革命」と捉えた）[27]と党の分裂の危険性（労働者反対派等の党内反対派の存在）に直面して、レーニンは、いまメンシェヴィキ党に政治的自由を与えることは、共産党政権の崩壊に、反革命の勝利につながると断定し、メンシェヴィキ弾圧を是認した。[28] 二一年四月、彼は、メンシェヴィキとエスエルには「監獄のなかに（または白衛派と一緒に外国の雑誌のなかに）席を与え」[29]てやるべきである、と書いている。

二一年二月末以降、メンシェヴィキ党にかつてない弾圧が加えられた。同党は二一年中に党員の大量逮捕[30]と入獄または国外追放によってほぼ崩壊した。ネップの採用を機に、共産党側に転向した人々も少なくなかった。[31]

二一年春以後、メンシェヴィキ党の殆どの集会は秘密裏に開かれた。[32] ただ、モスクワでは同党はかなり自由に活動できた。二一年四月のモスクワ市ソヴィエト選挙ではメンシェヴィキの参加が許可され、選挙前の大量逮捕と選挙妨害にもかかわらず、一八名のメンシェヴィキが当選した。[33] 地方ではソヴィエト選挙前の大量逮捕、様々な選挙妨害、当選した代議員のソヴィエトからの追放によって、メンシェヴィキはソヴィエトから殆ど姿を消した。[34] 二二年一月のモスクワ市ソヴィエト選挙はメンシェヴィキが参加した最後の選挙であった（五名当選）。[35] 同年九月、メンシェヴィキ党中央委員会は、候補者名簿に載った党員がチェカの標的となって逮捕され、選挙前の集会でメンシェヴィキを支持した労働者が工場から追放されるという現状ではソヴィエト選挙への参加は不可能であるという旨の声明を発表している。[36] 同年末からは、国内のメンシェヴィキは完全に地下に潜行して宣伝活動を続けなければならなかった。

共産党内にはメンシェヴィキ抑圧に反対する声はなかったか。まず労働者反対派はどうであったか。労働者反対派は確かに労働者の直接的利益の重視、労働者民主主義の尊重、労働者の自主活動の促進の要求、官僚主義への攻撃、等の点で

はメンシェヴィキと共通するものをもっていた。しかし、彼らは「極左理想主義」ともいうべき性格を特徴としていて、「戦時共産主義」の消費・流通面についてはそのなお一層の深化を目ざしており、社会主義建設のための客観的諸条件に関する問題意識は希薄であったように思われる。また、彼らは共産党の政治独占には何ら異議を唱えていなかった。我々は労働者反対派がメンシェヴィキ党を公然と弁護したという例をいまだ知らない。

「君主制主義者からアナキストに至るまでの」言論と出版の自由を提唱したミャスニコフを別とすれば[37]、共産党の左翼的潮流のなかでソヴィエト内の反対党の実質的合法化を主張したことが現在知られているのは、かつて「左翼共産主義者」に属し、やがてトロツキー派に加わったヴァルディンである。彼は二一年春の時点ではチェカの報告係のような仕事をしていたが、メンシェヴィキ、エスエル、アナキストの諸党派内のいくつかのグループが合法化されるべきであり、個々のメンシェヴィクやエスエルがモスクワ市ソヴィエト選挙に参加できるように釈放されるべきだと報告書で提案した。これは四月一四日の党中央委員会政治局会議で審議され、否決された。レーニンはモロトフへの手紙のなかでヴァルディンの考えは「正しくない」と書いている[38]。

共産党内の穏健派はどうであろうか。公表されている資料によって彼らの動向をつかむことは極めて困難であるが、まずジノヴィエフについて見てみると、穏健派をいちはやく脱け出し、党の重鎮となっていた彼は、メンシェヴィキに厳しかったといわれている。二〇年春の選挙でも彼が統轄していたペトログラード市ソヴィエトではメンシェヴィキは殆ど当選者を出せなかったらしい。ダンは、ジノヴィエフが二一年二月の労働者騒擾の際投獄されたダンを銃殺しようとしたが、共産党中央委員会がこれを認めなかったという話を、のちにラデックから聞いたという[39]。また、セルジュは、ダンやアブラモヴィチらメンシェヴィキ指導者の命を救ったのは、レーニンに掛け合ったゴーリキーであったと回想録のなかで書いている[40]。

しかし、このジノヴィエフも、二二年にはネップが新しい事態をつくり出し、共産党は「非ボリシェヴィキ社会組織」

の存在を許しており「弾圧は時代遅れになった」と述べ、メンシェヴィキ党等への弾圧緩和を仄めかしたこともあった。[41]また、ソ連人研究者ポドボロトフは、二二年初めにウィーン・インターの音頭取りで三つのインターの合同の動きがあった際、メンシェヴィキ党の合法化についてラデックとジノヴィエフが「動揺し」、レーニンから厳しい批判を受けたことを明らかにしている。[42]

穏健派のルィコフ、カーメネフ、ルナチャルスキーは逮捕されたメンシェヴィキの釈放に尽力しているけれども、メンシェヴィキ党の合法化についての彼らの考えは明らかではない。

共産党の最高指導者レーニンはメンシェヴィキ党の実質的合法化を拒否し続けた。晩年の彼がかつての友マールトフのことを気づかっていたという話は有名である。しかし、レーニンは、結局最後までメンシェヴィキ党に対する弾圧の緩和を指示しなかった。二二年二月末には、彼は司法人民委員に「外国の手先（特にメンシェヴィキとエスエル）に対する弾圧を強化する」（強調はレーニン）ことを指令している。[43]

そして、共産党内では、内戦期に台頭してきた新エリート層、精力的だが、古参党員に比べ一般にマルクス主義や社会主義についての理解が浅く、独裁的・官僚的に統治することに慣れ、「ソヴィエト民主主義」の保持にも関心をもたない特権的エリート層がますます強固な地位を築きつつあった。[44]

他方、メンシェヴィキは、二二年春以降、共産党政権への批判をますます強めていった。

マールトフは、二二年に次のように述べている。反革命軍との内戦は終り、封鎖と干渉は最終的に解消した。一方、西欧では革命の波が減退した。『何をなすべきか』のなかで提起されていた「国民経済における社会主義的要素と私的資本主義的要素の結合」は、社会主義化した西欧の側からの計画的経済援助のもとでロシアにおける社会主義のための諸条件の成熟という歴史的過程をはやめることを期待していた。しかし、それは今は望みえない。ロシアでは、経済の再建は「資本主義的方法」で行なわれなければならない。とはいえ、国家経済の領域は、まだ大きなものにとどまる（現状では、

その拒否は、全工業部門の消滅を意味し、国の農業化をもたらすであろう)。しかし、それは社会主義ではなく、「真の意味での国家資本主義」である。経済再建期のメンシェヴィキ党の主要任務は、労働者階級の組織の自由、社会保障、労働条件の改善を求める闘争を遂行することである。

政治体制については、共産党体制は、ネップ導入以後、資本主義の発展に適応させられた「絶対主義的な、国民の無権利に基礎を置く国家」に変質している。しかし、この体制を武力で打倒すべきではない。それは現状では「白衛派またはボナパルティストの独裁」を引き出すおそれがある。メンシェヴィキ党は「組織された大衆の圧力」で現体制から政治的譲歩を勝ち取り、この体制を民主的に解消させ、勤労諸階級の権力を実現する「民主共和制」を目ざさなければならない。[45]

二三年四月にマールトフは死去したが、彼が提起した新方針は、二四年の新党綱領[46]の基幹をなすものであった。メンシェヴィキ党は、内外の状況の変化を理由に、その立場を後退させた。ただ、我々が注意しなければならないのは、二三—二四年のこの時点でも、同党の指導部(国外にいた)は中央派=左派が大多数を占めており、「反民主的」ブルジョアジーとの共同闘争を固く拒絶し、共産党内の穏健派に依然として期待をかけていたことである。[47]彼らの期待は、結局は実現しなかったのだが……。

共産党政権は二二年末までにエスエル系の残存組織をほぼ崩壊させ、二三年からは「メンシェヴィキとの闘争」に力を入れた。[48]検挙の対象は、メンシェヴィキ党を既に離れていた者にも及んだ。彼らは「誓約書」を書かされた。[49]二三—二四年には、メンシェヴィズムとの完全な決裂を宣言する元メンシェヴィキの集会や組織解散集会が各地で開催されており、ソ連人研究者はこれをメンシェヴィキ党の自己崩壊の現われとして重視している。[50]しかし、メンシェヴィキの側は、これを当局により強要されたものだと見なしている。[51]

メンシェヴィキの地下宣伝活動も失敗に終った。国家政治保安部(ゲー・ペー・ウー)(チェカの後身)の監視がメンシェヴィキと労働者大衆との接触を妨げていた。飢餓の脅威は既に去っていた。激烈な政治的変動の時代を潜り抜けてきた労働者大衆は、もはや

政治問題に強い関心を示さなくなっていたという。[32] 二四年秋、共産党モスクワ委員会は、メンシェヴィキのビラが出なくなったことを確認している。[33] その後もメンシェヴィキ検挙は続き、地下出版物も出されているようであるが、国内でのメンシェヴィキ党の組織的活動は、二四年末までに終ったと見てよいであろう。メンシェヴィキ党は、社会主義と民主主義との関係についての重い問題を残して、ソヴィエト・ロシアの政治舞台から姿を消したのである。

① Л. Кришман. Героический период Великой Русской Революции. (Издание первое). М., [1924 ?], стр. 182.
② Haimson (ed.), pp. 206–207.
③ Martow / Dan, *Geschichte...*, S. 318.
④ O. Anweiler, *Die Rätebewegung in Rußland 1905–1921*, Leiden, 1958, S. 295.
⑤ Getzler, p. 201. 邦訳、三二三頁。マールトフは、他の八市についても、メンシェヴィキの代議員数（八—二〇名）を挙げている。
⑥ Сборник резолюции и тезисов..., стр. v. ウクライナはメンシェヴィキの勢力の強い所であった。
⑦ Ленин. Полн. собр. соч., т. 51, стр. 412 (прим. 157). 邦訳、第四四巻六八九頁。
⑧ この時レーニンは同市ソヴィエト議長カーメネフに、「私の考えでは、君は実際的な仕事を委任することによって彼らを『こきつかう』べきだ。ダンには—衛生区の仕事を、マールトフには—食堂の監督を」（強調はレーニン）と指示している（там же, стр. 150. 邦訳、第四四巻四五一頁）。
⑨ Третий Всероссийский съезд профессиональных союзов. 6–13 апреля 1920 года. Стенографический отчет. Часть 1-я, М., 1921, стр. 110.
⑩ Getzler, p. 201. 邦訳、三二三頁。
⑪ Ф. Дан. Два года скитаний (1919–1921). Берлин, 1922, стр. 7–15; *British Labour Delegation to Russia 1920: Report*, London, 1920, pp. 63–65.
⑫ 《Правда》 № 117, 2 июня 1920 г. стр. 2.
⑬ Haimson (ed.), p. 227.
⑭ *Ibid.*, pp. 220–222.
⑮ *Ibid.*, p. 223 と引用されている。
⑯ 《Социалистический вестник》, № 1, 1 февраля 1921 г., стр. 15.
⑰ Getzler, p. 208. 邦訳、三三五頁。
⑱ Восьмой Всероссийский съезд Советов рабочих, крестьянских, красноармейских и казачьих депутатов. Стенографический отчет, М. 1921, стр. 33.
⑲ Там же, стр. 34–43.
⑳ Там же, стр. 197–199.
㉑ Двинов, стр. 24.
㉒ P. Avrich, *Kronstadt 1921*, Princeton, New Jersy, 1970, pp. 35–46. 菅原崇光訳『クロンシュタット　一九二一』現代思潮社、一九七七年、三九—四八頁。
㉓ Дан. Два года..., стр. 112.
㉔ Avrich, pp. 44–45. 邦訳、四八—五〇頁。
㉕ *Ibid.*, pp. 46–51. 邦訳、五〇—五五頁。
㉖ 拙稿「ネップへの転換局面——第一〇回党大会における食糧税導入

の決定について――」『史林』五八巻二号、一九七五年三月、一一一一一一五頁。

㉗ 例えば Ленин. Полн. собр. соч., т. 43, стр. 36. 邦訳、第三二巻二〇二頁を見よ。

㉘ 拙稿「一九二二年ロシア共産党粛清」四〇―四一頁。

㉙ Ленин. Полн. собр. соч., т. 43, стр. 241. 邦訳、第三二巻三九一頁。

㉚ 同党の中央委員会の集計では、二二年三―四月だけで二〇〇〇名（モスクワが三〇〇名、他の都市が平均三〇―五〇名）が逮捕された（《Социалистический вестник》, № 9, 5 июня 1921 г. стр. 11）。

㉛ Haimson (ed.), p. 378.

㉜ *Ibid.*, p. 379.

㉝ 《Социалистический вестник》, № 7. 4 мая 1921 г., стр. 5.

㉞ Brovkin, "The Mensheviks and NEP Society...," pp. 351–355 を見よ。ソ連側の記述は Подболотов, стр. 99–104.

㉟ Haimson (ed.), p. 263.

㊱ 《Социалистический вестник》, № 18 (40), 21 сентября 1922 г., стр. 3.

㊲ 拙稿「一九二二年ロシア共産党粛清」五三―五四頁を見よ。

㊳ *Ленинский сборник*, т. XXXVII, 1970, стр. 289; Ленин и ВЧК. М., 1977, стр. 445–446. ただし、実際にはメンシェヴィキは選挙に参加している。方針の変更か。

㊴ Дан. Два года..., стр. 118–119.

㊵ V. Serge, *Mémoires d'un révolutionnaire, 1901–1941*, Paris, 1978, p. 144. 山路昭訳（旧版の訳）『革命家の回想 上』現代思潮社、一九七〇年、一七九頁。

㊶ Brovkin, "The Mensheviks and NEP Society...," p. 358.

㊷ Подболотов, стр. 29.

㊸ Ленин. Полн. собр. соч., т. 44. стр. 396. 邦訳、第四五巻六二一頁。

㊹ Brovkin, "The Mensheviks and NEP Society...," pp. 372–373, 377.

㊺ 《Социалистический вестник》, № 19 (41). 4 октября 1922 г., стр. 3–8.

㊻ Там же, № 12–13 (82–83), 20 июня 1924 г. に付録として収録されている。

㊼ Там же, приложение, стр. 4; Haimson (ed.), pp. 310–319.

㊽ Подболотов, стр. 117.

㊾ 《Социалистический вестник》. № 11 (57), 12 июня 1923 г., стр. 15.

㊿ Подболотов, стр. 112–115.

(51) Broido, pp. 142–144.

(52) Brovkin, "The Mensheviks and NEP Society...," pp. 367–369.

(53) Подболотов, стр. 116.

結　語

ソ連史学はメンシェヴィキ党を「小ブルジョア政党」の範疇に入れている。これは、共産党のみが労働者階級を社会主

義に導きうる党であるという観念から出てくるものであろう。確かにボリシェヴィキ党＝ロシア共産党に比べ、メンシェヴィキ党には社会主義革命を主体的積極的に追求し遂行していこうとする姿勢は著しく弱い。しかし、だからといってメンシェヴィキ党を「労働者政党」ではなく「小ブルジョア政党」の範疇に押し込めてしまってよいものであろうか。

メンシェヴィキの念頭にあったのはロシア労働者階級の利益の擁護であったということは、本稿で挙げた様々な事例からして明らかであろう。メンシェヴィキ党の漸進路線は内外の状況のなかでのロシア労働者階級の位置の考察（それが正しかったにせよ、そうでなかったにせよ）から発するものであって、ブルジョアジーや小ブルジョアジーの利益をプロレタリアートの利益の上位に置くところからくるものではない。一〇月革命後、マールトフの率いるメンシェヴィキ党が体制内の合法的反対党の道を選択したのも、メンシェヴィキ的見地からして道を誤っているとはいえ、労働者階級がボリシェヴィキの背後に実在していると見たからこそであった。メンシェヴィキは内戦期にはブルジョア＝地主反革命の側にではなく共産党政権の側に立った。さらにドイツ革命勃発以降は、メンシェヴィキは世界が社会主義への移行期に入ったと信じ、ロシアでも社会主義に至ることが可能であると考えるようになった。ソ連史学はこの時期のメンシェヴィキ党の左傾を「口先だけ」のものとしか捉えていないが、我々には、それはあまりに低すぎる評価であるように思われる。

ソ連史学はまた、メンシェヴィキ党は共産党によって暴力的方法で解体させられたのではなく、大衆の利益を裏切り、大衆の支持を失って自己崩壊したのだとも主張しているけれども、我々はこれについても疑問を抱かざるをえない。確かに憲法制定議会選挙の時点までにメンシェヴィキ党は労働者大衆から見捨てられ、政治的に破産したと見てよいであろう。しかし、国際派のマールトフが党の主導権を掌握してからは、この党の影響力の回復が認められるのである。だが共産党の（特に地方の）指導者は自党が少数派となったソヴィエトをしばしば武力をもって解散した。メンシェヴィキ党は反革命の党としてソヴィエトから放逐された。

その後、メンシェヴィキ党はソヴィエトへの復帰を許されたが、レーニンらがメンシェヴィキに求めたのは実務的活動

のみであった。体制の改革を要求し続けるメンシェヴィキに対してはソヴィエト選挙への干渉等の形での弾圧が加えられた。内戦の終結と共に弾圧は一時緩和されたが、やがて「戦時共産主義」の破綻と大衆の反乱に直面した共産党政権はメンシェヴィキ党を危険視し、これをソヴィエトから完全に排除した。同党が国内で消滅するまでの過程で我々の目につくのは、むしろ共産党政権の側からの弾圧の方である。

ソ連史学はメンシェヴィキ党が「共産党の指導的役割」を認めていなかったことを強調している。確かにメンシェヴィキ党がそれを原則上認めていたとは思えない。しかし、同党はマールトフの指導下に共産党の武力打倒の試みを一切放棄し、諸ソヴィエト内で自党の勢力を拡大するという平和的、合法的手段によって体制を民主主義的に変革することを目ざしていた。共産党は、社会主義的変革の追求という自己の信念に則ってではあろうが、メンシェヴィキのこの試みを許さなかった。「ソヴィエト民主主義」はロシア共産党自身によって否定され、殆ど虚構と化した。内部の民主主義的批判者としてのメンシェヴィキ党が完全に放逐されたのち、ソヴィエト体制内に存在するのは共産党と政党結成を許されぬ無党派のみであった。そしてまた、このようにして一党独裁を完成させた共産党内部でも、内戦期に台頭してきた新エリート層を基幹として、批判を許さぬ権威主義的なシステムが、ますます堅固に構築されてゆくであろう。

（山口大学人文学部助教授　　）

ing class history after the middle of the nineteenth-century. But, recently these groups have been reconsidered with special attention to the quality of their values. In the course of this reconsideration, it is claimed that these figures have been much influenced by the distinction between "the respectable" and "the rough" drawn by middle-class contemporaries as external observers of the working-class. If it is so, how did "the respectable working-men" see themselves? In this article, we tried to approach this question by analyzing the autobiographies written by working-men themselves and showing their identity in them. As a result, it is made clear that these autobiographies have two aspects: on the one hand, autobiographers show their belief in respectability, which the middle-class idealized, and on the other hand, they show their identity with "traditional culture", which, to middle-class eyes, would contradict respectability. This, in return, will show how arbitrary that distinction was, and how superficial the figure of "the respectable working-men" is.

Меньшевистская партия и Российская Коммунистическая партия

Соудзи Амакава

Хотя советские историки считают меньшевистскую партию «мелкобуржуазной партией», она являлась партией, наиболее уважающей интересы рабочего класса придавая им большое значение. Это определило также выбор меньшевистской партией, руководимой Мартовым, пути «легальной партии» в рамках нового режима после Октябрьской революции, потому что она видела позади большевистской партии (Российской Коммунистической партии) реально существующий рабочий класс в России. Она пытала приобрести поддержку как можно больших рабочих для того, чтобы обращать, пользуясь их давлением, курс советской власти на «правильный путь».

Несмотря на то, что советские историки утверждают, что меньшевистская партия, изменив интересам масс, потеряла их поддержку и погибла сама собой, на деле она опять начала приобретать поддержку рабочих масс, недовольных жесткими политиками РКП, и именно поэтому она часто потерпела репрессию со стороны РКП. Весной 1921 года коммунистическая власть перед лицом краха «военного коммунизма» и массовых восстаний сочла ее весьма опасной, сильно репрессировала и привела ее к развалу. Итак коммунистическая власть сохранилась, но «советская демократия», которую РКП раньше внушала массам, значительно потеряла свою сущность.